紅月は女神の祈り

中原まなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅月は女神の祈り

【Ｎコード】
Ｎ３４９４Ｚ

【作者名】
中原まなみ

【あらすじ】
――守るための、力をください――
【女神の使者】と呼ばれし少女エリスは、幼なじみのアンジェラと共に家を出る。ただの家出だったはずのそれは、いつしか世界をも揺るがす大冒険になっていった――
◇
◇
紅き月と少女の奏でる、異世界冒険ファンタジー。◇毎日更新。／自サイトにもあり

1

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

紅き月　天空＜ソラ＞に掛かりし刻
証を持ちて生まれし者
汝
月の子也り――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夜の帳が街に下りる。
ルナ大陸でも比較的都会にあたるここ、セイドゥール・シティは、それでもまだ闇にその場所を完全にあけ渡すことはなかった。
うすぼんやりとした街灯を眼下に見つめ、赤き少女は窓際の椅子に腰掛けていた。
小柄な少女だ。年のころなら十四、五歳といったところだろうか。
動きやすそうな服や、首からぶら下がった真紅のペンダントも、どことなくちぐはぐで――まだ、幼さを引きずっている。
だが、それよりもまず目を引くのは少女のその髪と瞳だろう。
短く切り込まれたショート・ヘアと、少し猫目気味の大きな瞳。
そのどちらもが、真紅。
彼女が首から下げているペンダントのそれと、同じ色なのだ。
肌の色からすると黄色人種だろうが――その艶やかな髪と瞳は、あきらかに黄色人種としての特色ではない。
色素異常。そして、その首から下がっているペンダント――いや、正確に言うなら、ペンダントの石。真紅の石。それらが意味するのは、この大陸ではたった一つしかない。

すなわち――……
「あたしは……」
その少女が、軽く頭を上げた。頭上にあるのは、夜空。そして、
その中に浮かぶ、少しかけた円――
月。
「あたしは女神様の……」
少女の赤毛が、風に揺れる。
「おもちゃじゃ……ない」
少女の赤毛が、風に揺れる。
少女の赤眼が、月光に揺れる。

――夜の帳が、街に下りる。

2

緑が濃い。柔らかく降り注ぐ太陽光は、木々の合間からまるでレースのように肌に模様をつけていた。

それにしても――

一体何匹目なのだろう。

エリスはそれを思うと嘆息を漏らした。二十三まで数えて、そこからは数えるのをやめた。数えれば数えるほど、疲れが増す気がしたからだ。

斬り倒したばかりのそれ――見た目は狼、しかし鱗付きの魔物――を見下ろして、エリスは右手に持っていた剣を振った。剣についた血がびゅっと飛ぶ。けれど飛びきらない血油がぎらぎらと気持ち悪い。血の臭いはとっくに感じなくなってはいたが、やはり胃のあたりがむかむかとした。

――まったく、今夜の剣の手入れはいつもの倍はかかるだろう。

「あーもー、ちょーむかつくぅ！」

横手からの甲高い声に、エリスはもうひとつ嘆息を追加した。この台詞は十七回目だ。こっちは倒した数より少ないので覚えていた。それにしても、いいかげんうざったい。

「アンジェラー。だまってよもー。あんたの声でいらいらする」

「だって！　ちょーうざいよ！」

「だからそれはあんただって」

こちらを振り返ってくる少女に、エリスは半眼を投げた。ぷっと頬が膨れているのは拗ねている証だ。顔を真っ赤にして、息も上がっている。

紫色の瞳に、腰まである黒くつややかなウェービー・ヘア。エリス自身と違って白人で、アンジェラの名前のとおり天使のような外見だ。黙っていれば可愛いのに――とは思うが、悔しいので一度も

本人に言った事はない。幼なじみという照れくささもあるが。
「だって！　多すぎ！　何匹倒したのよう、もう。少なくとも三十は倒したわよう……」
「……三十超えてたか……」
再度、溜息。溜息ひとつに幸せがひとつ逃げていく、と聞いたことはあるが――だとしたら、あたしはこの瞬間にいくつ幸せを放り投げたのだろう、とエリスは苦笑した。
「ねぇ、エリスぅ。何でいきなりこんなことになってるわけ？　ここ」
今さら聞いてくるアンジェラに、エリスは頭痛を覚えた。
「あんた……今まで何も知らずに戦ってたわけ……？」
「うん」
あっけらかんと頷くアンジェラに、エリスはこめかみをもんだ。
「……さっき、入るとき言われたでしょうが。大陸全土における異常現象のため、魔物が大量発生しています、って」
「……そだっけ？」
「聞きなさいよヒトの話！」
あまりにあまりな言葉に、思わずエリスは怒鳴っていた。アンジェラが人の話を聞き流すのはいつものことだが、自分の身が危機にさらされるような重大な内容まで聞き流してもらっては困る。
「だって、長いし。あの管理人の話」
「……ああもうー。わがまま娘！　魔物が異常に発生してんのよ！　無駄に！　多く！　なってんの！　判る！？」
「そりゃ、戦いまくってるから判るけど。なんで？」
「……もーいい……」
その理由が判らないからこそ、最近大陸中で国家単位の会議が開かれているのだ。いまもその真っ最中で――エリスの両親も、アンジェラの父親もその会議に出ているはずだ。マグナータ家は騎士家系だし、アンジェラのライジネス家は男爵位を持っている貴族なのだから。しかしその一人娘がこれでは、なんともまあ――ライジネ

ス男爵は、子育ての才能には恵まれなかったらしい。
「あーもう。ほら、とっとと進むよ。ティア・ドロップ見つけてさっさと帰ろう」
「えー。せっかくここまで来たんだから、旧神殿よって行こうよー」
「だったらさっさと進めっての！」
「あ、冷たいわねぇ。せっかくあんたのお仕事手伝ってあげてる私に、そういうこと言うんだ、エリスは」
「頼んでないでしょ！？　あんた勝手についてきただけでしょ！？」
「だって、ラスタ・ミネア久々だから来たかったんだもん。でもこんな魔物多くなってるならやだー。帰ろうー」
（こんのわがまま娘……）
　毒づく。アンジェラのわがままは今に始まったことではないが――こういう状況下でのそれは、普段と違って緊迫した意味を持ちかねない。魔物との戦闘。それが絶え間なく続くこの森――ラスタ・ミネアの中では、ひとつのわがままからあっさり死を迎えてもおかしくはない。
「あたしは仕事なの。ティア・ドロップ二十本。とっとと見つけないといけないんだから。アンジェラ先に帰ってなさいよ、そんなこと言うなら」
「えー。やだ」
「……じゃあ黙ってついてくる！」
　吐き捨てて歩き出すと、アンジェラが慌てて付いてくるのが判った。背中越しにアンジェラの気配を感じながら、ばれないようにほっと胸をなでおろす。ついてきてくれないと、困る。アンジェラは確かに魔導も使えるが、この森の中でひとりでいれば、ものの十分とたたないうちに死体になりかねないからだ。自分で先ほどいった言葉が頭の中をめぐる。無駄に多い。魔物。
　それに――実際、助かっている。エリス一人でも、この森は危険だ。剣の腕はかなりのものだと自負してはいるが、それにだって限界はある。特にこういった対複数の戦いの場合、アンジェラの魔導

はかなり役に立つのだ。
「ねー、エリスぅ」
とことこと付いてきながら、アンジェラが思い出したように声をあげる。
「……何？」
肩越しに促すと、アンジェラは小首をかしげて、聞いてきた。
「資金、貯まってるの？」
その言葉に――ぎくりと心臓がはねた。
「……貯まってる」
エリスはアンジェラから視線をはずすと、前を向いたまま頷いた。知らず知らずに足早になっている。かさり、かさりと緑を踏む音が耳に障った。
資金は貯まっている。――もう十分なほどに、だ。
「ふーん……ホンキなんだ？」
「……当然。何よ今さら」
「……別にぃ」
トーンの低くなった声が気がかりだったが、エリスはアンジェラのほうを向くことは出来なかった。罪悪感が、それを許さなかったのだ。
（……言わなきゃいけないんだけど……）
いつ言えばいい？　どのタイミングで？　しかも今さら――？
今夜発つことにしているなどと、今さら言えるだろうか。けれど、何も言わずに発つことは出来ない。それだけは絶対に出来ない。十三年間。アンジェラが生まれてからずっと一緒だった。姉妹のような関係。それなのに――
「……エリス、来るよ。もー一匹」
ふいに思考を割って、アンジェラの声が鋭くなった。緩んでいた気を引き締め、意識を戦闘モードへと切り替える。気配が――する。
「右だね……来たら、すぐ殺る。タイミング、お願い」
「オーケイ。……四、三……」

抜いた剣を握りなおす。相手に一撃の猶予も与えないで戦うほうが、ずっと勝率は上がる。そのためには、アンジェラの『能力』が役立った。

一瞬先の、未来を見る能力。

「ニ、一……今っ！」

「はぁぁぁぁぁぁっ！」

呼気。右手にしていた剣を、真一文字に横に凪ぐ。それはエリスの意識というよりは、体が勝手に行ったような感覚だった。脳で考えるよりもずっと早く、体が反応していた。エリス自身が気付いたときには、手のひらに重い手ごたえがすでにあったのだ。

その重さにぞくりとする――ひまもなく、それはあっけなく地面に倒れた。

「うーわー……」

倒れたそれを見下ろして、アンジェラが淡々と呟いてくる。

「ねぇねぇ、見て見てエリスぅ。腕が四本もあるわよ。気色わるぅーい」

それは確かに、そんな形態だった。この森に入ってから、実にさまざまな魔物を目にしてきた。小鬼から、やたらどでかい蜂から、鱗狼にアメーバー状のよく判らない魔物まで。けれどこれはまた……なんというかけったいな魔物だ。

大まかに見れば人型だろう。しかしアンジェラの言うとおり、人間で言えば肋骨にあたるような部位から、おまけといわんばかりに腕が二本伸びている。浅黒い肌は気持ち悪さを増大させて見えた。

「私こんなの初めて見たわよ。ねぇねぇ、これ、なんて魔物？」

「知らない。新種でしょ？　最近やたら発生してるらしいし」

「ラスタ・ミネアでも？」

アンジェラのきょとんとした表情。まぁ疑問としては当然だろう。『神聖たる』旧神殿が置かれた『輝ける水の森』＝ラスタ・ミネア。そこにまで魔物が発生しているなど、今まででは考えられなかったことだ。それに付随して『新種』。けれど、事実は事実としてある。

「あんたの目の前にあるのが真実。それ以外にどう説明しろって？」
逆に問い掛けてみるが、アンジェラにしたらそんなものはどうでもよかったらしい。落ちていた木切れでつんつんとその死体をつついている。
「あーやっぱ気色悪いねー。燃やしていい？　火葬火葬。わぁ、アンジェラちゃんやっさしー！」
「……あんた、それで火事とか起こさないでよ……？」
「しないわよぉ、私エリスほど馬鹿じゃないもん」
あっさり言うと、アンジェラは口の中で呪文を唱える。本人の言うとおり、周りには何の被害も出さずにその死体は火に包まれた。しばらくして、燃え尽きる。
「魔導って便利だよねぇ……」
思わず呟いたエリスに、アンジェラはにっと皮肉な笑みを浮かべてきた。
「こんなの、子供でもできるわよ？　エリスが特別、おかしいだけ」
「うるさいなぁ」
確かにこの魔導大陸ルナでは、たいていの人間が苦もなく魔導を操れる。理由はよく知らない――というかエリスにしたら知ろうが知るまいが関係なかったので学んでいない。どうせ、向き不向きがある。エリスほど『魔導』に関して鈍いのは珍しいらしいが。
「あたしは、これがあるからいいの」
剣を指して見せると、アンジェラは何もいわず肩をすくめた。そのままてけてけと歩き出す。迷路のような森だけれど、アンジェラの歩みには不安もない。それもそのはずで、この森の道は十分に把握している。
昔よく、ここを遊び場にしていたのだ。ここ、というよりはこの森の奥にある旧神殿を、だが。そこを『ひみつ基地』にしていた。最も、ここ数年来ていなかったけれど。
「しっかし、あれだよね。こんなんなってるなら、もーちょい警備増やしたほうがいいよね、この森」

「私たちが出入りしてたときよりは、ずいぶん厳しいじゃない」
「あれは、ほとんどなかったも同じじゃない。そりゃ、今は一応管理人と兵士が入り口守ってるけど……あの程度じゃ入ろうと思えば入れるじゃない。これ、やばいよ？　いたずら気分で入ったら、死ぬって、マジで」
「ま、そのあたりはあとでお上に言えばいいじゃない。――と、フェアリ・ベリーとうちゃぁく！」
アンジェラが嬉しそうに走り出した。その先にあるのは、大きな湖だ。フェアリ・ベリーと呼ばれる湖――の、正確にはおおもとだ。セイドゥール・シティそのものが、このフェアリ・ベリーの上に乗っかっている水の都だから、ここだけをそう呼ぶのは適切ではない。まぁ、そんなのは教科書で十分だろう。街の人たちも大概がそう思っている。ここが、フェアリ・ベリー。
アンジェラは湖のほとりにひざをつくと、そっと小さな手で水をすくった。のどに流し込み、大きく息をつく。
「あー、おいしーい！　生き返るぅ」
エリスも一度周りの気配を確かめてから、同じように水を飲んだ。疲れきった体に、ひんやりとした水の感触が心地よい。血の臭いに麻痺した鼻すら、少しずつ回復傾向にある。森の匂いがした。
「さて、と。この辺りよね？　あの似非ぺんぺん草」
「……『ティア・ドロップ』です」
「似たようなものじゃない」
「違うわい」
ぺんぺん草と形状は似ているけれど、同じにしたら薬草の面目が立たないではないか。エリスの半眼をアンジェラはあっさりと受け流すと、ほとりを歩き始める。探しているのだろう。エリスもこっそり溜息をついて、同じように探し始めた。
「ふぅー。これで、二十本ね！」
アンジェラの溜息に、エリスは苦笑して頷いた。持ってきてた布

袋に最後のティア・ドロップを放り込んで、口を閉じる。結構時間はかかってしまったが、何とか見つけることが出来た。
「あとは、これを……えーと」
「ジャックさんとこに届ければおしまい」
「あ、そっか。パズーのお父さまね。そんじゃ、行く？　エリス」
「あんたが素直に帰ってくれるなら、あたしは喜んで行くけど？」
くいっと親指で背後にある建物をさしてみると、アンジェラは慌てたようにまくしたてた。
「あ、だめ。ストップ！　先に寄っていく！　旧神殿！」
「だと思った。じゃ、行ってみよっか。久々だし、あたしも嬉しいや」
エリスはにっと笑うと、アンジェラとともに旧神殿へ足を向けた。

3

ルナリット神殿。この旧神殿は、確かそんな名前だった。
最もそんな名前で呼ぶ人間は、ほとんどいない。ここは旧神殿。それでいいじゃないかというのがたいていの人間の考え方だ。エリス自身含め。
十数年前まで、ここは現役の神殿だったらしい。とはいえ新しい神殿が街中に出来てからは見向きもされなくなった。しかしそれが逆に、建物の頑丈さとあいまって『ひみつ基地』にはもってこいだったのだ。
多分、探せばまだあちこちに隠した宝物だのなんだのが見つかるはずだ。
なれた足取りで神殿内を進んでいく。ひんやりとした空気は、いつ来ても変わることがない。清浄なる神殿――ということなのだろうか。戦闘に疲れきった体には、心地よいことこの上なかった。
エリスはふと顎を上げた。高い天井に描かれた神話。
眉をしかめる。不愉快だった。
「なに、あんたまたぁ？」
身じろぎしたのを見つけたのだろう、アンジェラが呆れたように言ってくる。
「仕方ないじゃん」
嫌いなものは嫌いなのだ。この神話のせいで、何度不快な思いをしたことか。
天井画には、真紅の月が描かれていた。フレスコ画――だろうか。ところどころ継ぎ目が見える。あまりこの絵の作者はフレスコ画に慣れていなかったらしい。
真紅の月と、それに重なるように描かれている裸身の女性――いや、女神。このルナ大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。その腕の中にいるのは、赤ん坊だ。赤ん坊の手のひらには、何か赤いものが

見えた。紅の石を握っているのだ。
「月の者、かぁ」
「……うん」
エリスは小さく頷いた。剣を収め、手持ち無沙汰になっていた右手でそっと胸元のペンダントに触れる。
月の石。
今見上げていた、あの絵画の赤ん坊が握っているそれだ。紅の、ルビーにも似た色で、石の中に不思議な紋様が見える。
「紅き月、天＜ソラ＞に架かりし刻、証を持ちて生まれし者、汝、月の子也り――だってさ？」
アンジェラが天井画を見上げながら呟く。天井画に書かれた句を読み上げたのだ。エリスはこれ見よがしに舌打ちをした。アンジェラが眉をひそめる。
「あんた……いくらなんでも神話絵に舌打ちは、バチがあたるわよ……？」
「イコン（聖像画）じゃないからいーの。てか、いくらでもバチもってこい。どうせ今とそんなにかわりゃしないよ」
「……そんなに嫌い？」
「嫌い。大っ嫌い。なんであんな神話のせいでただの人間じゃないなんていわれなきゃならないのよ」
「まぁ、わかんなくもないけどさ」
アンジェラが肩をすくめて、さらに小声で続けた。
「世界に危機迫らんとするとき、女神は我が子を産み落とす――」
アンジェラの小さな声が、それでもエリスの耳に飛び込んでくる。嫌な言葉として。
この言葉で、何度からかわれたことだろう。逆に言えば、エリス自身が生まれたということは、世界が危機に瀕しているらしいということになる。
月の者――女神ルナの使者＝エリス・マグナータ。
「世界の危機とかいわれても、そんなもの知らないもん。あたし」

「まぁねー。ま、いいじゃん？　ほっとけば。どーせ、セイドゥール出ればそんな大きな問題じゃないでしょ？」
「知らない。国教に指定してるのはこの国だけだけど、それでも『大陸の女神様』だもん。割と信仰はされてると思うし」
「……そんなものなのかなぁ」
アンジェラがくいと首を傾げるが、エリス自身聞きかじりだ。そんなものかどうかは――今夜からきっと、嫌というほど判るはず。
それから、会話が途切れる。お互い疲れていたし、何よりも今交わした言葉が、次の台詞を生み出せなくしていた。
無言のまま、神殿の奥へ奥へと進み――そして。
つとアンジェラが足を止めた。エリスもなんとなく同じように足を止める。
旧神殿の最奥部。女神の間――

嫌な感じがした。アンジェラはその感覚に理由をつけることはなかった。けれど、事実としてあった。嫌な感じがする――
広間に目を滑らす。あの頃とそんなに変わっていない。多少埃っぽくなって、老朽化も進んでいるだろうが、見た目には変わりない。だとしたら、何がそんな嫌な感じを生み出しているのだ――？

紅。

フラッシュのように意識に飛び込んできたそれが、視界の片隅に映っていた彫刻像だと気付くのに、数秒を要した。
アンジェラは反射的にそれをまっすぐと見つめた。
紅い月の、彫刻。細かい細工の施された、芸術品。イコン――聖像画が現神殿に移されてからも、これだけは変わらずここにあった。昔からだ。それは変わらない、はずなのに――
（やだ。なんで……今日はこんなに気持ち悪く思うの？）

知らず知らずのうちに、喉が上下して唾を飲み込んでいた。不快感。
そして、見た。
（……！？）
思わず息を呑み、隣に立っているエリスの服を引っ張る。
「……エリス……あれ、何！？」
「何って……彫刻でしょ？　前からあったじゃない」
「そうじゃない！」
自分でも驚くほど、声音は悲鳴じみていた。
「ちゃんと見なさいよ！」
半ば裏返った声で叫び、震える人差し指でそれをさした。
「……え？」
エリスが戸惑いながらそれを見る。そして……息を、呑んだ。
その横顔をちらりと視界に入れて、アンジェラは苦々しく思う。
ああきっと、今同じ顔をしているわ、私たち。

――ッキィィィィィッ――

「っ！？」
唐突に響いた不協和音――そうとしか表現できない、耳鳴りではない何か――に思わずアンジェラは目を閉じた。
耳が、脳が、心臓が、痛い。痛い。
それでもよく判らない強迫観念に突き動かされるように、うっすらと目を開く。見たくない。けれど、見ないといけない。何故かは、判らないけれど。
月の彫刻。女神ルナのイメージとして彫られたそれは、ただの彫刻ではなくなっていた。うすぼんやりとした紅の光を放出し、そこから――
「……何。何か、映ってる……！？」
エリスが疑問符をあげる。アンジェラはかぶせるように悲鳴をは

いた。
「ちょっと！　何か出てくるわよ！？」
紅。
今度は本当に閃いたその光は、瞬間その場を飲み込んだ。そして何事もなかったかのようにそれが収まると――月の彫刻の上には、人影があった。
裸身の、女性。
金色の髪はくるぶしまで届き、エリスと同じ真紅の目は、ただ真っ直ぐにこちらに向けられていた。眩しい――と思ったのは、光のせいなのか、それともその女性自身のせいなのか、それはアンジェラには想像すらつかないことだった。
ただ、判る。見てはいけない。見てはいけなかったのだ。きっと。美しすぎるこの女性を視界に入れてはいけなかったのだ。もう、遅いけれど。
その瞬間、運命の歯車は、回り始めてしまうから――
その時、だった。
「……」
エリスが無言のまま、一歩足を踏み出した。
「ちょ……エリス！？」
一歩。二歩。三歩。――もっと。もっと。いつものように慣れた歩き方ではない、どことなくぎこちない人形のような歩みで、彫刻に近づいていく。いや、彫刻に、ではない。あの、裸身の女性の影に、だ。
「やだ、ちょっと！　エリスってば！」
慌ててその腕をつかむ。だが、普段では考えられないような乱雑さで払われ、アンジェラはその場にしりもちをついた。
「エ……エリス……？」

こちらの言葉は、エリスには届かなかったようだ。エリスはその女性の数歩手前で足を止めると、ひざを折った。臣下の礼のように、頭をたれる。

ふいに気付く。エリスのペンダントが――あの、紅の月の石が、ぴかりぴかりと点滅している。まるで、何かに応えるかのように。

「……ルナよ」

「――！」

凍ったエリスの声に、アンジェラは弾かれたように立ち上がった。

「エリスッ！」

悲鳴が喉をついて出た。裏返ったその声にすら、エリスは全く反応しない。走り出し、エリスへと手を伸ばす――

キィィン……

「……っあ！」

アンジェラはその場に転がった。何故？　何故転がっているのだろう――？　ただ、走っただけだ。エリスに近づこうと走って、それで――

（……壁！？）

ふいにその考えに行き着く。そう、走って、それで――弾かれたのだ。何かに。見えない何かに。

もう一度立ち上がり、今度はゆっくりとエリスの傍へ歩み寄る。けれど、やはり触れるか触れないかの位置になると、指先が何かに弾かれた。壁だ、壁がある。見えない、透明な壁が、そこにある。エリスとアンジェラの間に。

「やだ。やだ、やだやだやだ。何よこれ！　これ以上いけないなんて、何でよ！　やだ。エリス、エリスッ！」

錯乱しかけている。自分でそう思った。けれどどうしようもない。傍にいるのに、おかしくなった親友に手も触れられない自分がもどかしくて、どうしようもなかった。

けれど、目の前の、目の前にいる触れられないエリスは、変わらない調子で言葉を続けた。
「――我、此処に来たり」
「だめ！　エリス、エリスってば、この馬鹿！　聞こえないの？　ねえ！」
見えない壁をバンバンとたたいてみる。ああ――パントマイムに見えるだろうか。パントマイムの大会があれば優勝だ、チクショウ。何で、とめられない？
混乱した頭の中に、ふいに声が割り込んできた。

『――月の者よ』

目を、見張る。誰の声だ――？　この場には今、エリスとアンジェラ自身しかいない。そのどちらの声でもない。だとしたら、可能性はひとつ。
アンジェラはぞっとした表情で人影を見た。月の彫刻の上に浮いている、裸身の女性。
「……はい」
エリスが、しっかりと頷いた。ということは、この声はエリスを呼んだのだ。目の前のあの人影は、エリスに話し掛けている。
『時、来たれり。
汝、我が元へ来る事を拒まぬか……？』
淡々とした声。そこに意思などない。問いかけではない。確認でしかない。ひんやりとした、そう、この神殿内の空気のような声。
「拒みません。我が主、ルナよ」
（ル、ナ――！？）
薄々感づいてはいた。けれど、エリスの口からその言葉が再び発せられたとき、アンジェラの体に衝撃が走った。
大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。それが、そこに、いる――？
『なら、来たれよ。我が子よ。汝、月の子也り――』

ぞくり。
全身の毛が、粟立つ。何も考えられない、何も考えてはいけない。そんな気がした。震える指がカタカタと耳障りな音を発していた。それから気付く。いつのまにか、床にへたり込んでいたらしい。
カタ。カタ。カタ、カタ、カタ……
爪が、冷たい床を同じリズムで叩いていた。耳障りだった。けれど、願った。もっと、もっと大きな音なら良いのに！　この声を掻き消してくれれば良いのに！
しかし、そんなささやかな抵抗も願いも、意味はなさなかった。
エリスの背中が、しっかりと、言葉を発した。

「――はい」

紅。
三度目の光が満ちた。それは、先ほどまでと違って、エリスのペンダントから発せられたものだった。
そして、それが収まったとき――人影はもうそこにはなかった。
沈黙。
「……え？　あ、あれ？」
その沈黙を割ったのは、なんとも間抜けな声だった。エリスだ。さっきまでのおかしなエリスではない。いつもの、エリスの声！
「エリス……！」
アンジェラは立ち上がった。途中で一度かくんとひざが折れたが、無理やり立ち上がる。
冷たい床を蹴って、ぼんやりとしたエリスの腕にしがみつく。しがみつけた。触れられる。大丈夫。
「エリス、エリスあんた、大丈夫！？」
「……何が？」
訳が判らないと目を白黒させているエリスに――どっと力が抜けた。再び床にへたり込む。

「うわっ、ちょっとアンジェラ！？　何、どーしたってのよ。疲れたの！？」
「……」
無言で首を振る。エリスは何も覚えていないのだ、きっと。
「……後で、話す。だからとりあえず、ここ、出よう」
薄い息の間から言葉を吐き出すと、エリスは困惑した表情で頷いた。
エリスに支えられて立ち上がりながら、アンジェラは混乱した頭を整理するのに必死だった。
少しだけ、はっきりしていることはある。
操られたのだ、エリスは。
女神、ルナに。
そして、女神は言った。

時、来たれり――と。

アンジェラの様子が、どうにもおかしい。
拗ねているのかなんなのかは知らないが、無駄口ひとつ叩かずに、もくもくと前を歩いている。時折出てくるはずの魔物には、多分彼女自身の能力で先見したのだろうが、出てくる前に魔導を放っている。おかげで行きとは比べ物にならないほど、ラスタ・ミネアの道は楽に進めたが――なんだか怖い。それに、多少の不安感がある。
アンジェラの使う火や土の魔導は、正確には確か法技と言う。それは魔導師としての能力だ。それはいい。使いすぎるとめまいや貧血に似た症状を起こすこともあるらしいが、そのあたりの加減はしているだろう。
だが、先見の能力。これは、法技ではない。限られた能力者――魔女、特殊能力者――が扱える『魔法』だ。アンジェラもまた、ただの人間ではないのだ。

その魔法は、アンジェラ自身そんなに操れるものではないらしい。自分自身によほどの危機が迫ったときや、身近な人間の身が危険に準じたとき――あるいは、神経が張り詰めているときに唐突に『見える』というのだ。行きはそれほどこの能力は発揮していない。それなのに、今は次々と『見て』いるのだろう。よくない兆候とも言えた。身の危険か、それとも、アンジェラの神経が過敏になっているのか――

いいかげん黙っていることにも疲れて、エリスは口を開いた。

「ねぇ、アンジェラ。さっきからなに怖い顔してんの？」

「……知らないって気楽でいいわよね」

刺々しい。振り返りもせずに言ってくるアンジェラに、エリスはさすがに苛立って声をあげた。

「ちょっとなによう、つっかかるなぁ。あたしが一体何したってのよ！？」

「……操られた」

ぽそりと言ってくるアンジェラの言葉に、エリスは目を瞬かせた。

「……は？」

――その時、ふいに殺気がふってきた。

4

「エリス、上ッ！」
鋭いアンジェラの声と同時に――いや、それよりも一瞬早く、エリスは後方に跳んでいた。右足首に着地の感触。それと同時に、銀色の光が迫ってくる。
「――ちっ！」
まだ地面についていなかった左足を、力いっぱい突き出した。影に当たる。
だが、牽制にもなりはしなかった。追いすがる銀光に、赤毛が数本飛ぶのを視覚で確認した。上半身をそらし、何とかよける。
「エリスに何するのよッ！」
アンジェラの甲高い声。
それとともに――影はいきなり真横に吹っ飛んだ。
「……！？」
息を整えながら、声の主――アンジェラのほうを振り返った。それから、思わず肩を落とす。
「……いや。あんたさ、もう少しこー、気の利いた助け方もあるんじゃないかと思うんですがあたし」
「贅沢言わないの」
アンジェラが拗ねて唇を突き出す。まぁ、助けてもらっておいてその言い草はないだろうが、それにしたって、哀しいものがある。
（ナップザック……）
アンジェラはとっさに手にしていたナップザックで影をはたいたらしい。タイミングがかみ合ったせいか、上手い具合に吹っ飛んだのだ。
つづりの間違ったへたくそな字で『あんじぇら・らいじねす』と書かれた古ぼけたナップザック。それ自体は別にかまわないのだが……それに助けられた剣士とは、ちょいとばかり虚しくもある。

（せめて魔導でふっとばすとかこう、戦闘らしい行動をして欲しいよ……）
「エリス、ヘンなこと考えてる暇あるなら、とっとと剣抜いて。来るわよ。四人」
アンジェラの言葉に、呼気をひとつはさむ。思考を切り替えて、気配を探った。いる、確かに。ゆっくりと、剣を抜く。飾りも何もない実用的な剣。人差し指が剣の柄についた古い傷に触れた。握る。それが、ジャスト・ポジションだと知っている。
と――吹っ飛ばされて地面に転がっていた人影が、むっくりと起き上がった。男だ。三十代だろうか――体のごつい、ただの男。特徴らしい特徴も見当たらない。
「……おはよーさん。いったいどういったご用件でしょうか？」
皮肉を投げてみると、明らかに苛立った様子で唾を吐く。それで判る。戦闘のプロというわけではなさそうだ。
「……エリス・マグナータとアンジェラ・ライジネス、だな？」
「そうだけど、それが？」
「ていうか、馬鹿よね、貴方。私たちを襲ってから確認するなんて。手順逆じゃないの？　お・じ・さ・ん？」
アンジェラが冷ややかな目で毒を吐く。思わずこみ上げる苦笑を飲み込んで、エリスは続けた。
「ま、いいけど。お仲間も出といで。気配ばればれだよ？　隠しているつもりなんだろうけど？」
言いながら、気配のするほうに指を向けてみる。
「ほら、そこ。そことそっちも。早く出てこないとアンジェラの魔導で吹っ飛ばされるわよ？　この子、なんか知らないけど苛立ってるみたいだし」
「あら、違うわよエリス。出てきても吹っ飛ばす。てか出てきてから確実に吹っ飛ばす」
「……まぁ、どうでもいいけど」
苦笑していると、観念したのかなんなのか――三つ、人影が出て

くる。
「うわ。無個性……」
アンジェラが呟いているのを耳にして、なんとなく頷いた。街中にいても埋没しそうな風体の男達。ごつい三十路男と四人そろったところで、大して強敵でもなさそうだ。
「……何故、判った」
「へ？」
「気配は消していたはずだ」
男の一人がそう言ったのを聞いて、エリスはアンジェラと顔を見合わせた。これ見よがしに盛大な溜息をついてやる。
「……ほんっと馬鹿ね、あんた達。ただのチンピラさん？　確かに割と気配消すのは上手かったけど、あたし達襲うなら、下調べくらいしてきなさいよ」
「そうそう。エリスがやったら気配に敏感だとか――この私の特殊能力が、一瞬先の未来を見ることだ、とかね？　お・ば・か・さ・ん」
あかんべーとアンジェラが舌を出す。その様子が、男達の頭に血を上らせたらしい。手に手にナイフや剣を持って迫ってくる。
が。
「ハイハイ、さようなら！　渦巻け、大地の精！」
アンジェラが口早に唱えた呪文は、あっさりと法技と言う形になった。断続的に大地に爆発が起き、視界が土煙に覆われる。
げほげほっと咳き込む声が聞こえ――同時にエリスは怒鳴っていた。
「ちょっとアンジェラ！　あたし達の視界まで見えなくさせてどーすんの！」
「いいじゃん。エリスどうせわかるでしょ。あとよろしくー」
「……くそったれ」
「下品よ、エリス」
アンジェラの軽い笑い声に促されるように、エリスは目を閉じた。

視覚を閉じ、それ以外の感覚を目覚めさせる。
思考は、いらない。ただ、体が動くままに――剣を振るう。

腰につけていた黒い布で、剣についた血をさっとぬぐった。それほど多くはない。致命傷は与えていないからだ。
腹部を抑えてうずくまっているのが二人。仰向けに細い息を吐いて、左腕から出血しているのが一人。もはやすっかり意識はないのか、うつ伏せになっている男が一人。その男の両足からは、これまた出血。
「うーん……鉄臭いことこの上ないわね。エリスってさぁ、手加減できないの？」
「してるじゃんおもいっきり」
「てか、流血沙汰ばっかり。無血で勝つ、とかそういう嗜好はないの？」
「無理。てか、これ両刃。どうあがいても、無理」
憮然とした表情で答えると、アンジェラはくいっと伸びをした。
「ま、いっかぁ」
一言呟き、手近にいた三十路男の胸倉をつかむ。
「グッモーニン、ダーディ？　いい朝よー」
「……えげつな」
べしべしと遠慮なく頬を叩くアンジェラに、思わずエリスは呟いていた。
「なによう、文句あるならかわる？」
そう言われ、面倒だったので肩をすくめて手のひらを出した。もう何も言いません、どうぞご勝手に。
ぷんとそっぽを向いたアンジェラは、そのままがくんがくんと男の胸倉をつかんだまま揺さぶった。
「おーきーなーさーいーよー！　ダーディ！」
「いやそれはもういいし」
「……う？」

「あ、おはよう。ダディ」
起きた。
うっすらと目を開いた男が、状況を理解したらしい。ひっと小さく息をのむ。
動けないはずだ。両足を怪我している。もしそうでなかったとしても、動けないはずだ。戦闘にそれほどなれているとも思えない、男。今エリスが細く絞ってわざと出している殺気に、対抗できるとも思えない。
「さてさて、ダーディ。私、ダディに聞きたいことがあるんだけどなぁ」
「……アンジェラ、怖いから」
「あんたの殺気のほうが怖いわよ。ね、ダディ？　答えてくれるわよね？」
それにイエス以外の選択肢があるはずもない。なんともいえない、奇妙な怖さがアンジェラにはある。エリスはそれをよく知っていた。
答えない男に、アンジェラは笑顔を向けた。無言はそのまま、あの子の中ではイエスになる。
「ありがと、ダディ。じゃ、まずひとつ。どうして私たちを襲ったの？」
「……何故、言わねばならない」
「ダディだから」
（うっわ……）
傍で聞いていて、思わず苦笑する。むちゃくちゃな理論展開。アンジェラだからこそ、だ。
「ダーディー。言わないと後でひどいわよぉ？」
「……ま、さっさといったほうが苦しまないと思うよ？」
エリスにしても、とっとと理由は知りたかったので、そういって剣を抜いてみる。ただの脅しだが、脅しはこういう場合本当によく効くのだ。
実際、効果はてき面だった。男はひっと息をまた呑み、震える声

をあげた。
「や、やめてくれ！」
「やめるから、言えっての」
冷ややかに告げる。男はぎゅっと下唇をかんでから、吐いた。
「……や、雇われたんだ、街の入り口で。ただそれだけなんだ！」
「街って、セイドゥールのよね？　誰に？」
アンジェラが小首をかしげた。
「……おまえ達と、同い年くらいの……ガキだ」
「子供ぉ！？」
素っ頓狂な声をアンジェラがあげた。
「やだ、やだなぁに？　子供に雇われてるの？　貴方？　うわ、ダディそれはちょっと情けないわよ？」
「お、おどされ……！」
「脅されたんだ。うわ、情けなさ倍。それで、情けな脅されダディ？　それは男？　女？」
えげつない。
放っておいたら男が泣き出しそうだったので、エリスは割ってはいる。
「そこまでそこまで。……で、そいつは、何？」
ほっとしたように男が息を漏らした。アンジェラがつまらないと呟いているが、こっちは無視する。
「……少年だ。本人はダリードと名乗っていた。……かなり、腕は、立つ」
ダリード。
聞き覚えのない名前に、エリスはアンジェラと顔を見合わせる。
「知ってる？　エリス」
「知らない。聞いたこともない」
「よねぇ。あ、あれかしら！　遠くから見つめるだけの少年の淡い恋心！　もどかしくて、もどかしくて、歪んだ形で溢れ出る愛……！」

放っておこう。
アンジェラはとりあえず無視して、エリスは男に向き直った。
「――で？　その少年はなんて？　あたしを殺せとか？」
「おまえの……」
男がこちらを指差してきたので、エリスはきょとんと瞬いた。
「……の？」
おまえ『を』ではなくて？
エリスを殺せだとか誘拐しろだとか痛めつけろだとか――そういったものだったら『を』のはずだ。なのに『の』？
眉をしかめてもう一度問いただす。
「のって、どういうこと」
「……おまえの、ペンダントだ。それを、捕って来いと。それから、二人を殺せと。順番は逆でもいい、とは言っていたが。とにかく、ペンダントを捕って来いと言っていた」
「……月の、石を……！？」
アンジェラがぎょっと叫び声をあげた。エリスは、それすら出来なかった。
声が出ない。
震える左手で、そっとペンダントの石を握った。ひんやりとした慣れた感触。小さな石だ。もう幾度となく握ってきた形は、しっかりと手のひらが覚えていた。
月の石。女神ルナの使者、月の者が生まれてくる際握っている石――それを、狙っていた？
「……月の石を、この石を狙っていたの？」
「それをかどうかは知らん。ペンダントを、といっていただけだ」
（じゃあ、そうってことじゃない）
エリスはやや呆然とした意識の中で呟いた。月の石をペンダントという形にしたのはエリスの父だが、それに使われている紐はただの――本当にただの安っぽい紐だし、そんなものを狙うわけがない。石だ。石が狙いなのだ。

月の者の証である、石。だが、証以上の意味があるとも思えない。確かに握っていると落ち着いたりはしたが、それは生まれたときからのお守りみたいなところがあるからだろう。エリス以外の、例えばアンジェラなんかでも、そんなことはないと笑う。それはただの石だ、と。

では――何故、狙う？

宝石としての価値は高いだろうが――本当に希少品なんて狙うのはただの馬鹿だ。そんなものはあっさりと足がついてしまう。まして月の石など――売りさばくにはかなり不適切な代物だ。

狙われる理由が、思いつかない。それが逆に不安だった。よく判らない何かが、渦巻いている。そんな気がした。

「……そいつは、何者なの」

「知らんといっただろうが。ただのガキだった。少なくとも、見た目はな」

男が吐き捨てるようにいった。それから、ふいに思い出したように続ける。

「――と、ひとつだけ違うのは、おまえのそのペンダントの石と同じ物を、胸元につけていたことくらいか」

「――ッ！？」

アンジェラが息を呑む音が聞こえた。いやに耳に残る。

「月の石を……持っていたの！？」

エリスは思わずアンジェラを押しのけて、男の胸倉を引っつかんでいた。右手の剣が震えて小刻みに揺れる。

「そいつが月の石を、持っていたって言うの！？」

「そ……そうだ！　そうだっ！　は、はなしてくれ！」

月の石を持つのは、月の者だけだ。そのはずだ。

そして月の者は――エリス自身、自分以外には知らない。知らなかった。

もしそれが事実なら、そいつは――……

「じゃあそいつも月の者だって言うの！？　そいつはどこにいるの

！」
「落ち着きなさい、エリス！」
凛とした声に、錯乱しかけていた脳が静まり返った。アンジェラだ。
彼女はエリスの左手を男の胸倉からはずすと、きっとこちらを見据えていってきた。
「こいつ、単に雇われただけよ。深いところまでは知らないわよ、きっと」
そう言うアンジェラの瞳が、あいまいに歪んでいた。
「……アンジェラ？」
「サイッテーのタイミングね」
アンジェラが吐き捨てる。意味がよく判らなかったエリスが視線で問い掛けると、アンジェラは小さく首を振った。
「まぁ、いいわ。とりあえずこいつら、役人に突き出しましょう。その後で……話すから」

その後再び無言になってしまったアンジェラと一緒に、エリスはラスタ・ミネアを出た。そこで、警護兵と管理人に男達を渡す。
「エリス！　アンジェラ！」
ふいに響いた声に、振り返る。
「……パズー。カイリ」
通りからこちらへ駆けてくる見知った人影の名を二つ、エリスは呆然と呟いていた。
丁寧に切りそろえられた黒髪に、高価なめがねをつけた少年、カイリ。
明らかに色彩を取り違えているとしか思えない服装と、金色の、気障ったらしい妙な髪形をした少年、パズー。
エリスとアンジェラの男友達だ。ひみつ基地もこの四人で作った――言ってしまえばグループみたいなものだ。

その二人はエリスたちの前まで走ってくると、そろって膝に手をついて身を折った。二人ともあまり、体力的なものはない。
「……何してんの？　あんたたち」
呆れたようなアンジェラの声に、まだしも体力のあるカイリが顔を上げてうめく。
「……心配してきたんですよ」
「心配？」
「……ぼ、ぼくの……」
と、パズーが途切れ途切れに言葉を発する。
「……父上が……依頼……」
「……ああ」
エリスはアンジェラと顔を見合わせて頷いた。パズーの父親、魔導医ジャックの依頼で、この森にきていたのだ。
ラスタ・ミネアに生えている希少種の薬草『ティア・ドロップ』を採ってくる。それが依頼だったのだ。
「……父上、知らなかった、らしくて……その」
「魔物の大量発生？」
助け舟を出してやると、パズーはこくりと頭を垂れた。
「ぼくが……気付いたら、とめた、んだけど……エリスも、父上も……はなしてくれなかったし……」
「……ごめん」
気まずさにエリスはうつむいた。仕事をしているのは『計画』があるからだ。だがその『計画』はアンジェラにしか話していない。パズーにもカイリにも、幼なじみだというのに話していないのだ。
アンジェラが嘆息をついて、二人に向き直った。
「ま、ありがと。でも大丈夫だったわよ、とりあえずはね、一応ね、何とかね、私はね」
「……どうかしたんですか、アンジェラ？　ものすごく含みのある言い方ですけど……」
「べっつにー？」

訊くカイリに、アンジェラはぷいとそっぽを向く。そのカイリが疑問符を飛ばしてくるが、理由はエリスも判らなかったので肩をすくめてみせた。
アンジェラのわがままにはなれているのだろう、カイリが微苦笑をもらす。
「……まぁ、無事でよかったですけれど。本当に……心配したんですよ」
「……ごめん、ありがと。パズーもね」
「……うん」
エリスが礼を言うと、パズーもカイリも穏やかに笑った。ずきりと、胸の奥が痛んだが――気付かないふりをした。
「……それで、エリス？」
アンジェラがふいにこちらを向いて、
「今日はこれからどうするの？」
問い掛けてきた。
「――……」
思わず答えに窮して口を噤む。
今夜、発つ。
言うなら今が最大のチャンスだ。だが――
ふと、見上げる。パズーとカイリ、二人の男友達の姿。
「……どうか、したかい？」
眉間にしわを寄せるだけのカイリの変わりに、パズーが訊いてくる。
「あ、いや……」
さっと前髪をかきあげて、言いつくろう台詞を探した。視線があいまいにさまよい、定まらない。
『計画』の話は二人は知らない。アンジェラには話したい。今夜発つと、今言いたい。だが、二人がいる前では……答えられない。
「……これから、あんたんち行くよ、パズー。ジャックさんの依頼、終わったから」

「……依頼、ですか」
カイリのあいまいな響きを持つ声に、エリスは軽く笑ってみせる。
「うん。冒険者のマネゴトしたくってね、ジャックさんにお願いしたの。だまっててごめん。なんか、恥ずかしくてさ」
「……それだけですか？」
「そうだよ？」
大嘘だ。アンジェラの顔が皮肉に歪んでいるのを視界の隅で確認したが、どうしようもないので気付かないふりをする。
「じゃ、いこっか。心配してくれてありがとね、二人とも」
笑いながら歩き始めたが、カイリの顔にもパズーの顔にも、ただ疑問だけが残っていた。

5

パズーの家、魔導医ジャックの診療所を出てすぐ、アンジェラはぐうっと伸びをした。

そろそろ夕刻が街を覆いはじめている。どこからともなく、夕食の匂いが漂ってきているハイアシンス・カッレ（ヒヤシンス通り）を二人で進んでいた。パズーとカイリとはすでに別れている。

遠くなだらかな山並みに、オレンジ色の太陽が沈もうとしていた。水の都セイドゥール・シティ。縦横無尽に運河が走り、入り組んだ街並みは、さながら水と人工物の迷路だ。エリス自身、この街で生まれ、十四年間暮らしてきたが、未だに『テリトリー』から外に出ると迷う。最もそれは、アンジェラ曰く『あんたが方向音痴すぎるのよ』。

その街中にある水路が夕焼けで赤く染まると、セイドゥール・シティはとたんにオレンジの街へと変貌する。夕陽のせいだけではない。セイドゥール・シティの建物は、大概が赤い屋根瓦で、それがオレンジの街へ変わる拍車をかけているのだ。

赤い屋根瓦と、水路に揺れるいくつもの夕陽。オレンジの街。キラキラとしたオレンジ色の水格子が、建物の壁面を模様付けている。水路を覗き込むアンジェラの顔も、だ。

そのアンジェラが、こちらを向いて言って来た。

「さーあってと。ジャックさんの依頼も終わったし、お給料ももらったし。パズーとカイリは追い払ったし！」

「……いや、そういう言い方はないんじゃない？」

「あんたにはさっきのことも話したし！」

「……」

思わず、沈黙する。アンジェラがちらりと意味ありげな視線でこちらを見てから、そばにある緑色のベンチをさした。

「座ろ。今日はもう、別に用事ないんでしょ？」

「……うん」
エリスは促されるままベンチに腰掛けた。目の前にある水路を、いくつものゴンドラ（水路舟）が滑らかな動きで渡っていくのをみる。
用事がないなんて、大嘘だ。今、言わなければならない。
計画の実行日が今夜、だと。
今、言わなければ。
エリスはぎゅっと下唇を噛んだ。渇く喉に、湿った空気だけを送り込む。唾すら、もうでなかった。水路を行くゴンドラを目で追いながら、思い切って口を開く。
「……ごめん、ウソ。用事、ある」
言ってしまってから、引き返せないことに気付いた。心臓が、ぎゅっとわしづかみにされるような痛み。
「……用事？　早く帰らないといけないの？」
「……ううん。夜中だから、今すぐ帰んなきゃいけないわけじゃないよ」
「夜中……？」
アンジェラの声が、いつもとは違う弱々しい響きでその言葉を繰り返した。表情はわからない。隣に座っているアンジェラの気配が揺れているのは判ったが、振り向くことは出来なかった。見たくなかった。見ることは出来なかった。
「……エリス、あんたまさか」
「……」
ひとつ、頷く。アンジェラが息を呑むのが判った。痛む胸をごまかそうと、ペンダントを握る。
「――今夜、出るつもり」

さらさらと、水の音がした。普段は意識しないと聞こえないはずのその音が、やけに耳障りだった。街の喧騒はまるで遠くて、別の

世界の音のようだった。
下唇を噛んだまま、エリスはただひたすらに前を見ていた。隣のアンジェラの顔を見られないばっかりに。
下ってきた別のゴンドラから、手を振ってくる人影を見つける。顔見知りのゴンドリエーレ（ゴンドラ乗り）だ。エリスは緩みがちな表情筋に活を入れ、無理やり笑みを作って小さく手を振った。ゴンドラが、ゆっくりと視界から流れていく。
「……彼には、話してあるの？」
アンジェラの声。表情筋に頑張ってもらった笑みは、もろくも崩れて微苦笑になった。微苦笑――いや、もしかしたら、他人が見れば泣き顔にも見えたかもしれない。
「まさか。……今、あんたに話したのがはじめて。他の誰にも言ってない」
「……そう」
アンジェラの沈んだ声。ちらりと、アンジェラの顔を横目で見る。横顔は、水格子に揺らめいて、表情まではよく読み取れなかった。
「――急よね」
「……さっき、決めたから」
嘘だ。もうずっと前から決めていた。けれど、言えなかった。ただそれだけだ。でも――こういうしか、ない。
「……そう」
「ジャックさんの依頼料もあるし。もうずいぶん資金も貯まった。……そろそろいいと思ったんだ」
顎を上げて、空を見る。いつのまにか、夕陽は山裾に沈んでしまったらしい。藍色と紫とオレンジのグラデーションが、空をかたどっている。
「……エリス」
アンジェラの強張った声に、エリスはもう一度視線をそちらに向けた。真っ直ぐな目が、こちらを見つめてきている。
「……本気で、するつもり？」

アメジストの瞳に、困ったような自分の表情が写っていた。
それでも、アンジェラは続ける。
「……本気でするつもりなの？　家出、なんて」
家出。
それが『計画』だった。そのためにずっと、資金集めをしていた。
だからこそ、エリスはしっかりと頷く。
「する、よ。今夜、出る」
アンジェラの瞳が、揺れた。
「……ずっと、決めていたことだし。それに……」
限界だった。アンジェラの瞳から逃れるために、エリスは立ち上がって水路に数歩だけ近づいた。涙腺が緩みそうになっているのを自覚する。
（馬鹿だ。何であたしが泣く必要があるのよ）
今夜の事を決めたのはエリス自身だ。自分で決めて自分で実行しようとしている、ただそれだけだ。なのになぜ、涙腺は緩みかけているのだろう。
「……それに、もう、潮時だと思った」
「……潮時？」
頷く。水路に映った自分の顔があまりにも情けなく歪んでいるのを見て、苦笑がもれた。
「そう……」
一度大きく深呼吸をして、エリスはアンジェラに向き直った。アンジェラの、いつもならキラキラと輝いている紫の瞳が、薄ぼんやりとしか光を宿していなかった。
「――今日、襲われたでしょ？　この」
と、胸元のペンダントを掲げてみせる。
「この、月の石が目的みたいだった。それに……その依頼をした奴は、もしかしたら……そいつも月の者かもしれない」
アンジェラが俯いて肯定した。
「その可能性は否定しないわよ。あんたと同じ月の者――女神ルナ

の使者」
魔導大陸ルナ。女神が治めしこの大陸で、女神の使者として時折産み落とされる存在があった。
紅の月――俗にローズ・ムーンと呼ばれる月が、夜を飾るその時、月の石と呼ばれる一欠けらの赤い石を持って生まれてくる子供。
月の者。それがエリスだった。
ローズ・ムーン自体は珍しいことではない。それは自然現象としてある。月の高度が低いとき、ちょうど夕陽と同じように光の屈折率が関係して赤く見える。自然現象の関係で、それは夏に見える場合が多い。
それだけなら問題はない。ローズ・ムーンの夜に生まれる子供は少なくない。
だが、それに月の石が加わると話は全く伝説じみてくる。
冬生まれのエリスが、紅の月の石を持って、ローズ・ムーンの、しかも満月の夜に生れ落ちたのは、それはそのまま彼女自身が月の者であることを意味した。
そしてそれは、エリスにとって――苦痛以外の何ものでもなかった。
「……そう、ずっと言ってたでしょ。あたしは、月の者になんて生まれたくなかった」
それは、アンジェラも同じだっただろう。魔女。特殊能力者。奇異な存在は、そのまま奇異な目で見られる。大人たちは重宝したが、子供はあからさまに疎外感を示した。どっちにしろ、嬉しい反応ではない。
アンジェラから目を離し、再び水路に向き直った。
エリスは、手持ち無沙汰になった手で、地面に落ちていた煉瓦の欠片を拾い上げる。それを、水面に向けて投げながら、続けた。
「けど……このままここにいたら、そう言う目から逃れられない」
パシ、パシ……パシャン。
二度水面を跳ねた煉瓦の欠片は、三度目で水路に沈んだ。藍色の

水路が、水模様を立てる。
ここに、ルナ信仰の国セイドゥールに居続けたならば、ルナの使者という人々の目から逃れることは出来ない。
だから――出る。この街を。この国を。
「それに……あんた達にも迷惑かけるし、今日みたいにね」
「……」
月の者だから襲われた。石を持っていたから襲われた。そして――それで、アンジェラを危険な目にあわせた。それは事実だった。
「……だから。もう、そんなのは嫌だから。あたしは、あたしのやりたいように、生きたいように、生きる」
再び、振り返る。戸惑いも何も過ぎ去った、アンジェラの真っ直ぐな目を見つめ返す。
そのアンジェラが、口を開いた。
「私のためでもあるって、そういいたいの？　あんたの家出は、私を危険な目に合わせたくないから、そういいたいの？　だったら言っておくわ。ありがた迷惑って言葉、覚えときなさい」
その言葉に、エリスは思わず笑い声をもらした。
「あんたなら、絶対そういうと思った」
アンジェラらしい、真っ直ぐな言葉。くつくつと笑い声が漏れた。
「――でも、違うよ。これは、あんたのためじゃない。あたしのためだ」
そう言うと、アンジェラは無理やりだろう、頬に小さな笑みを浮かべてきた。
「……そ、勝手になさい」
「……ごめん。アンジェラ」
「謝る必要なんてないでしょ。私はあんたの彼女でも家族でもないんだから」
どこか突き放すような言い方に、胸の痛みを覚える。そう仕向けたのは自分だ。
けれど、言わずにはいられなかった。

「……家族、みたいなものだよ。姉妹って言うの？　……ずっと、一緒だった」
アンジェラが生まれてから十三年。ずっと一緒に育ってきた。
二人で怒られたこともある。二人で笑いあったことも幾度もある。喧嘩もしたし、何日も口を利かないことだってあった。それでも、ずっと一緒だった。はじめてのおつかいやら、学生時代の思い出やら、そう言ったものの隣には、必ずアンジェラがいた。
血は繋がっていない。けれど、アンジェラはエリスにとって妹みたいな存在だった。
その、アンジェラがくすりと笑った。いつもの、迷いのない真っ直ぐな笑み。
「馬鹿ねぇ、エリス。今さら言うこと？　それ」
照れているのかもしれない。いやもしかしたら、もっと違う意味があるのかもしれない。ともかくアンジェラは、そこで言葉を切ると、一度だけ視線をはずし、それから再びこちらを見つめてきて、言った。
「……エリス。私、止めないからね」
それは、二人でいつか交わしたことのある『約束』だった。
お互いの決めたことに、口出しはしない。そういう『約束』。
「……うん、ありがとう」
エリスが言うと、アンジェラは柔らかな笑みを見せた。
「……ひとつだけ、言っておくわ。あんたは狙われている。それは確かよ。それに――」
こくり、とアンジェラの喉が上下に動いたのを、エリスは見逃さなかった。言いにくいことを口にするときの、アンジェラの癖だ。
「それに、さっき言ったでしょ。ルナの話」
「……うん」
再度、頷く。このハイアシンス・カッレを歩いている間に、アンジェラが話してくれた――というよりも、エリスが無理やり聞き出したに近いが――事だ。

「……なんだっけ。あたしが旧神殿で操られた、だっけ？」
確認のために聞いてみる。にわかには信じがたいことだったからだ。
「そうよ。その月の石……ペンダントが紅く光ってた」
見下ろす。それから、右手の人差し指で軽く紐を持ち上げてみた。紅の石が、小さく反射する。
女神ルナの使者が、生まれたときに持っている石。
エリスは小さな苦笑を漏らした。
この国から逃げるのは、そういったものを捨てたいがためなのに。
「結局……逃げられないって感じだね」
「わかってんじゃん。……どっちにしろ、国を出たところで、この大陸からは出る事は出来ないんだし……この、封鎖世界。魔導大陸ルナからはね」
アンジェラが、目を細めて顎を上げた。遠くを見るかのように。遠くにあるのはレイティディス山脈の姿だが、アンジェラの目はおそらく、それよりもずっと向こうを見据えている。
この大陸の外側、ルナ大陸海域の最果てには――結界がある。
アンジェラの目は、おそらくそれを見つめようとしているのだ。
「この大陸からは誰も出る事ができないし、他大陸から来る事も出来ない。女神が、大陸に結界をはっているから。そのことくらいは、あんただって知ってるでしょ？」
「……馬鹿にしないでよ。いくらなんでもそれ知らなかったら、あたしはなんなのよ」
「サボり魔」
「……いや、サボってはいたけどね。学校はね。って、そうじゃなくて」
苦笑。確かに授業に関しては、よくエスケープしていたけれど、それ以前の問題だ。自国の国歌を歌えと言われて歌えない奴もまれだろうが、たとえそれが出来ない奴だったとしても、これくらいの『大陸の話』は常識として知っているだろう。

女神の結界に阻まれし魔導大陸、ルナ。
「……まぁ、どっちにしろ。この国出ようと出まいと、ルナの手中から、この大陸からは出られないのよ、エリス？」
「判ってるよ」
「……それでも、家出、する？」
「――するよ」
アンジェラの口から、細い息が漏れた。
エリスはそれに気付いたが、気付かないふりをして、続ける。
「……あたしは、月の者でも、マグナータ家の……騎士家系の長女でもない。ただの、ひとりの、エリスって名前の……冒険者だ」
「……そ。もう、何も言わないわ」
アンジェラが笑う。けれど、何も言わないといったその口で、続けた。
「エリス。出て行くなら、好きにすればいい。私は止めないし、止める権利もない。けどね……ちゃんと、街の奴らには挨拶していきなさいよ？　パズーとか、カイリとか」
「……いや、迷惑かけたくないから、黙ってたんだけど」
エリスが家を出たことが知れたとき、アンジェラやパズー、カイリたちは、仲が良かったということで詰問されるだろう。それを、アンジェラだけに留めたかったのだ。だからこそ、黙っていたのに――挨拶なんてすれば、一発でおじゃんだ。
けれどアンジェラはあっけらかんと言ってのける。
「バレないように挨拶なさい。礼儀よ」
かなりの難題のような気はする。
「……難しいんですけど」
「あんたなら出来るわよ」
邪気のない笑顔に、エリスは思わず動いていた。手を伸ばし、アンジェラの細い体を抱きしめる。驚いたようにアンジェラの体は一度震えたが、何も言わず、抱き返してきた。
暖かい体温が、気持ち良かった。

「……気を、つけなさいよ。無茶しすぎるの、あんたの悪い癖なんだから」
抱きしめているアンジェラの体が、そう言葉を発した。エリスも、言った。
「あんたもね。……わがままばっかり、言うんじゃないわよ？」
アンジェラの体が笑うように震えた。手を離し、向き直る。アンジェラの背後に、一番星が光っていた。
瞬きすら惜しむように、エリスはそのアンジェラの姿を瞳に焼き付ける。
「……じゃあ、私は帰るわ。……もう、二度と……逢う事もないかもね」
「……あたしは、この街に戻るつもりはないから。そうかも、知れないわね」
言葉が、途切れる。アンジェラが、細い手を出してきた。それを握り返しながら、緩みかける涙腺を閉めるのに、エリスは必死だった。
アンジェラは、笑った。
「じゃあ、ね。……エリス」
「……ばいばい。アンジェラ」
手を離すとき、少しお互いためらった。けれど、手のひらが離れ、親指が離れ、最後に人差し指が離れたとき、もうこれが最後なのだと実感した。
「……ばいばい」
その言葉が、最後だった。
アンジェラはエリスに背を向けて、ハイアシンス・カッレを東へ歩いて行った。アンジェラの家の方向に、だ。
ゆるいウェーブの髪が、左右に揺れていた。
アンジェラの背中は一度も振り返ることなく、宵闇色に染まり始めたセイドゥール・シティに消えていった。

6

月は満ちていた。
中天にある、黄色い月。
春先の空にかかる月に、想いなどはない。あるとすれば、それはただ無理やりこじつけただけの、感傷に過ぎない。それは判っていた。けれど。
エリスは真夜中の空を見上げ、小さく口を開いた。
「――あんたなんかのために、あたしはあるんじゃない」
誰に向けていっているのか、自分でもよく判らなかった。だが、言わずにはいられなかった。
月は何も言わず、ただ雲間に揺れていた。
嘆息を、ひとつ。
エリスはむりやり月から目を離すと、自室に向き直る。
ぬいぐるみやら、本やら、絵画やら、そういったものが適度に置かれてある部屋。だがいつもより、幾分簡素に見えた。ベッドの上に乗っかっている大きなバックパックが、それらを簡素に見せている原因なのかもしれない。
ぬいぐるみが一体と、服が何枚か。寝袋に、お気に入りの詩集が一冊、あとは救急セットやお金やなんかの小物類。それらがぎゅうぎゅうに詰め込まれている。
それらを目で確認してから、エリスは窓際の椅子から立ち上がった。物書きデスクへと移動し、デスクの上に広げてあったバンダナを手に取る。
青い、バンダナ。
今日、アンジェラと別れた後、手に入れたものだった。
アンジェラの『言いつけ』通り、エリスは少ない友人達に『挨拶』をしてまわった。
ばれないようにするのはなかなか難しく、たいていの人々には『

いきなり何いってんの？　おかしな奴』というありがたくもない感想をもらってしまった。だが、一人だけ違った。
カイリだ。
カイリは――気付いていたのだろうか。もしかしたら。そう思う。
エリスはカイリの家へ行き、だが何を言えばいいか判らずにぼんやりとしていただけなのだ。だが、カイリはしばらくの沈黙のあと、苦笑した。
『そうそう、渡そうと思って、ずっと忘れていた物があるんですよ』
そういって、青いバンダナを渡してくれた。青という色彩の物をプレゼントにもらうのは、実を言うとはじめてだった。たいていの友人は、エリスには赤い色が似合うとプレゼントも赤いものをくれる。
それなのに、カイリは青いバンダナを渡してきた。
『青だね？』
『青ですよ』
くすくすと笑うカイリの表情は、柔らかかった。
『赤ばっかりだと、だれるでしょうから。こういう色を入れると、また気持ちも引き締まるでしょう？　似合うと思ったんですよ、逆に』
答えに窮したエリスにはかまわず、カイリはこうも言った。
『無茶、しないでくださいね』
その台詞を思い出し、エリスは苦笑を漏らした。
（ていうか、絶対気付いてるよね、あいつ）
昔から勘が良かった。誰よりも。だからきっと、気付いている。
デスクの上の真新しいバンダナを手にとって、エリスはそれを頭に巻きつけた。鏡を見て、自分でも驚いた。確かにカイリの言うとおり、ただ赤いだけよりもずっと引き締まって見える。
（ありがと）
口には出さず、呟く。カイリに。アンジェラに。心配してくれていたパズーに。友人達がこの街にいる。きっとここで頑張って生き

ていくのだろう。それは、エリスにとって寂しいことでもあり、けれど絆として残していける強い思いでもある。
あいつらが頑張っている。だから、あたしも頑張らなきゃいけない。そう思える。
壁にかけてあった剣を手に取る。バックパックを背負い、顎を上げた。

十四年間過ごしてきた、自室。

十四年間過ごしてきた、家。

きっと二度と戻らない、場所。

「さよなら」
呟く。
「――もう、戻らない」
戒めの言葉のように、呟く。
ここからは、誰のためでもない。自分のために、自分の足で、歩く。
板張りの床を踏みしめ、最後になるだろうその感触に目を細め、けれど、顎は上げたまま、エリスは歩いた。
さようなら、ともう一度呟いて。
自らの意思で、エリスは住み慣れた家を出た。

セイドゥール・シティの大通り、サンラバーズ・サリッザーダを辿っていく。街灯の明かりより、頭上から降る月明かりのほうが眩しいくらいだった。影が二つ、街灯と月明かりとに照らされて違った方向に伸びている。
さらさらとした水路の音が、昼間はあんなに耳に触っていたとい

うのに、夜の今は心地よかった。
はっきりと判る。それ以外に音はしない。
静かだった。静かすぎた。
おかしなくらいに。
――虫の音すら、しない。
「――……」
鼻から小さく息を漏らし、エリスは足を止めた。セイドゥール・シティの入り口に程近い、アグライア・カンポ（輝き乙女の広場）。
色煉瓦で造られた、幾何学模様の地面。深い緑の街灯と、同じ色のベンチ。広場の中央にはアグライア――裸身の童女の石像と、噴水がある。比較的大きな広場だ。
そしてここは、カナーレ・ローダという大きな運河が近く、ある意味で隠れやすい場所とも言えた。水音が、僅かな音ならかき消してしまう。
だが、エリスの肌はそこにいる何者かの気配をしっかりと捕らえていた。
「――出てきなさい」
我ながらシャープな声だと思った。感情が入り込んでいない、高い位置からの音。
エリスはどさりとバックパックを地面に放り出した。文字通り肩の荷を下ろしたあと、軽く体をゆする。腰につけた剣の鞘を左手で握り、右手で引き抜く。僅かに刀身が光を反射した。我知らず、柄の傷を探して指が動く。
「ばれてるって言ってるのよ。早く出てきなさい」
二度目の呼びかけに、今度ははっきりと気配が動いた。ぴんと張り詰めた夜の風が、エリスの真新しいバンダナを揺らした。
左だ。
煉瓦で作られた、低い花壇の後ろ、幾本か並んでいる植木。そこだ。エリスは視線だけをそちらに飛ばした。
闇が、現れる。人影となって。

中肉中背、と言っていいだろう。とどのつまり、小柄なエリス自身から見れば、僅かに顎を上げないと向かい合えないということだが。ゆっくりと、体全てをそちらに向ける。
全身を闇色の衣装で包んでおり、顔すらもはっきりとは判らない。僅かに、黒い鋭い目と、いびつに歪んだ鼻が覗いているだけだ。武器らしい武器も持っていない。暗器の類なら、いくらでも持っていそうではあるが。
「かくれんぼなら、もう少し子供の頃に誘ってほしかったね」
この手の物言いは、相手のレベルを探るときにエリスがよく用いるものだ。昼間の男は感情を剥き出しにしてきた。だが、プロと呼ばれるレベルに達したものだと、感情を見せてくることはない。
「そこ、あたしも昔かくれんぼのとき、よく使ったんだ。同レベルだね？」
「――エリス・マグナータ、だな」
プロだ。
瞬間、それだけを理解した。先ほど自分が発した声もシャープだと思ったが、それとは比べ物にならないほど、男の声は鋭かった。
鋭利すぎて、触れてもいないのに斬られてしまいそうな、そんな声だ。肌が粟立つ。
「そうだよ。いちいち訊くんじゃないっての。下調べぐらいしてきなよ」
震えないように、張り詰めた声で応じた。気を抜けば殺られる。まず、間違いなく。不安を見せたら、その時点で終わりだ。街を出る前に、あの世へ行ってしまう。
そんな気がした。
エリスの内心を知ってか知らずか、男が声を発した。
「アンジェラ・ライジネスは一緒ではないのか」
「――！？」
衝撃が走った。
その名前を聞くとは、思わなかったのだ。

狙われているのはエリス自身のはずだ。事情は判らないが、月の石を狙う者がいる。それがエリスが狙われる理由のはずだ。だったら、何故、アンジェラの名前がでる――？

「アンジェラが、どうしたのよ」

かすれた声は、感情を抑えきることが出来なかった。

はじける。

「あいつになんかしたら、あたしが許さないわよ！」

それは、一瞬だった。

「――ダリード様の命令により、貴様を殺す」

景色が流れた。

いや、正確に言うならば、自らの動きに視覚神経が一瞬追いついてこなかっただけだ。

エリス自身よく判らないままに、地面を蹴って後方に跳んでいた。そのとたんに理解する。太い錐のような武器が、喉もとめがけて伸びていた。体が避けるためにとっさに反応したのだろう。だが――早い。

「っ……！？」

一度きりのとっさの跳躍では、逃れきれない。右足が地面に触れた。もう一度、跳ぶ。水路が近いせいだろう、湿った空気が肌にまとわりついた。

再び、足の裏に地面の感触。いや、かかとには、僅かに感触がない。肩越しに視線だけで振り返る。

（カナーレ・ローダ！）

真後ろに、運河が迫っていた。跳びすぎたのだろう。かかとはすでに地面からはずれ、水の上にあった。逃げられない。

「くそっ！」

膝を緩め、追いすがる武器から逃れるために、体を右へ傾ける。反動で地面の煉瓦が崩れ落ちたのだろう、静かな水音が響いた。

緩んだ左膝のバネを使い、すくい上げるように右手の剣を振るった。手ごたえはない。間合いが広がる。

僅かに息をつく。時間にして、僅か数瞬の出来事。速い。
エリスは剣を構えた。右肩を小さくひき、見据える。
間合いを外されては敵わない。腹筋に力を入れ、今度はエリスから飛び出した。
「――ヒュッ」
口から漏れた呼気は、ほんの少しだけ音になったが、あとはただの空気でしかなかった。黒ずくめの人影の気配が、揺らぐ。こちらのスピードに、一瞬反応が遅れたらしい。跳ばれたが、追いすがる。間合いはこちらにある。あらなければならない。
湿った空気を薙ぐ。小さな手ごたえが、今度はあった。だが、意味はない。服を僅かに裂いただけでしかない。
その瞬間だった。
「……っあ！？」
激痛。
脳に飛び込んできた情報はそれだけだった。何処にそれが起きたのか、何が自分の身に降りかかったのか、エリスはよく判らなかった。慌てて左に跳ぶ。
青臭い水の匂いしかしなかったセイドゥール・シティの空気に、鉄の臭いが混じった。血だ。
そこまできて、ようやっと理解した。怪我をしたらしい。
（……どこ……）
痛みにかすむ脳をだましだまし回転させる。痛みの箇所が、ゆっくりと明らかになった。腹部。ちょうど、右わき腹のあたりだ。視線を落とすと、黒い液体で濡れているのが判った。黒い――いや、もっと光のある場所では、それは赤に見えるはずだろう。
（なんで？　いつ、怪我した？）
あの瞬間、間合いはエリスにあったはずだ。相手の武器の間合いではなかった。なのに、何故？
疑問は途切れざるを得なかった。
黒い風が流れた。

跳ぼうとして、カナーレ・ローダの事を思い出した。跳びすぎると、落ちかねない。逃げるかわりに、防御すればいい。吹き付けた風に剣を向ける。

ジャリ、と妙な音がした。風が正体をあらわす。

（……チェーン？）

黒光りする、ぎざぎざと小さな刃のくっついたチェーンだ。それが、剣にまきついていた。

思い当たる。

「邪道だね。暗器なんて」

エリスは唾とともに吐き出した。これだ。自分を傷つけた武器だろう。出血の量と痛みは、この妙な形の刃のせいだ。肉が真っ直ぐ切れなかったその分、痛みは強い。

やはり、持っていたのだ。暗器。邪道な武器だ。うかつだった。初めに思ったはずなのに。暗器なら、いくらでも持っていそうだ、と。

出血個所を左手でかばい、ゆっくりと後退した。怪我はそう酷くはない。深い傷ではない。だが、痛みは激しい。治りも遅いだろう。それこそが暗器の特徴でもあるといえたが。

勝率は五分だった。けれど今は――判らない。

（くそっ！）

内心毒づき、チェーンを振りほどくために剣を引っ張った。するりとチェーンが解ける。いや、違う。相手がそう仕向けたのだ。再び、まるで使い手に操られた蛇のような動きで、そのチェーンが襲い掛かってくる。弾けば、また巻きつかれる。そして動きが止まってしまったら――別の暗器が襲ってくるのだろう。

（どうすりゃいいってのよ！）

対処法がわからず、エリスは胸中で悲鳴をあげた。

その瞬間、場違いな可愛らしい声が響いた。

「炎を司りし者よ。我が前にありし者に裁きを！」

声は可愛らしかったが、内容はやたら物騒だった。攻撃系の呪文。
（え……！？）
エリスは思わず我が耳を疑った。と、轟音が耳をつんざく。目を焼くような紅い炎が膨れ上がり、熱風が吹き荒れた。肌がちりちりと音を立てる。
しばらくして炎が静まり、エリスは目を見開いた。
「ア……ン、ジェラ……？」
別れたはずの親友の姿が、そこにあった。アグライア・カンポの模様付けられた地面に、挑むように仁王立ちしている。細い体を包む洋服は、普段と何ら変わりない。紫を基調とした、シンプルなデザイン。こんな現場に居合わせているのが妙としか思えないような、スカート姿。その中で、月明かりをあびたゆるいウェーブの髪が、静かに流れていた。
その彼女は、一度にこりと笑った。そして、とたた、と幼稚な足取りでこちらに歩いてくると、あっけらかんと言ってのけた。
「夜は静かにしなくっちゃ、ご近所迷惑よ。だから、とっとと片付けるわよ、エリス」
ぴっと、アンジェラが細い指を伸ばした。黒ずくめの人影が、炎にあぶられた姿で呆然と立ち尽くしている。
その姿を見ながら、アンジェラがにっと笑った。
低い、けれどどこか楽しげな声で、告げる。
「私の親友いじめたら、殺すわよ？」

どうしてこうもあっさり、片がついてしまうのだろう。
痛みに揺れる意識の中で、それでもエリスは苦笑を漏らさずにはいられなかった。
戦いの過程そのものは、とりたてて単純だったわけでもない。ただ、決定的に違ったのはエリスの心理状態だった。負ける気がしな

かった。
　それがよかったのだろう。アンジェラと一緒に戦う機会はさほど多かったわけでもないが、それでも親友の呼吸は熟知している。戦闘の場と日常と、状況は違えど、それは変わらない。アンジェラの呼吸なら判る。彼女が今何をしたいのかは、理解できる。それが、とても戦いやすかった。
　結果――これだ。
　エリスは小さな嘆息とともに、地面に転がった男をつま先で蹴り上げた。ごろんと男が仰向けになる。息は浅いが、途絶えてはいない。まだ生きている。
　が、放っておけばいずれ死ぬだろう。致命的とも言える傷を負っている。手加減をする余裕がエリスにはなかったのだ。左胸から袈裟ぎりに、一直線、赤い線が引かれている。その上からアンジェラの魔導という、ありがたくもないおまけつきだ。こちらは手加減できなかった、というよりはなから手加減するつもりはなかったらしい。
　すぐにでも治療するべきだろうが、そこまでしてやる義理はない。明日の朝までもてば、誰かに見つけられるだろう。治療されるかどうかはまた別の問題だが、知ったことではない。
　エリスはその男を放ったまま、アンジェラに向き直った。
　右わき腹が、熱を持って痛みを脳裏に直接訴えかけていたが、それにかまうよりもまず、訊きたかった。
「アンジェラ……」
　男を見下ろしていたアンジェラが、迷うような動作の後こちらを向いてきた。
「なによ？　怪我なら、私はどうしようもないわよ？　自分で何とかしてね」
「そうじゃなくて。……なんで？」
　訊ねると、アンジェラはまた瞳を揺るがせた。それから、小さな苦笑を頬に浮かべ、

「エリス。あんたなんか、勘違いしてるわよ」
「え……？」
彼女はそのまま、落ちかけたショールを肩に戻しながら、笑った。
「昼間の話よ。ラスタ・ミネアであった男。あんたと――私の名前、確認していたじゃない？」
ぎゅっと、心臓が痛んだ。そう、聞きたくはなかったが、今倒れているこの男も、アンジェラの名前を告げていた。
「……そういえば、そうだったね」
「でしょ？　てことは、よ？」
アンジェラは腰に手を当てて、簡単な方程式でも解くような口調で続けた。
「――私も狙われているってことになるわ、そうでしょう？」
（気付かなくてもいいことに気付くんだから……）
全く、勘がいいというか頭の回転が速いというか、なんとも複雑な気持ちで、エリスは押し黙った。アンジェラは気にせず、かぶせるように言った。
「ってことは。あんただけ逃げるなんてずるいわよ」
「いや、ずるいって……」
そういう問題ではない、と続けようとしたが、それをさえぎってアンジェラが軽い笑い声を上げた。屈託のない笑み。
「――だから、私も付いて行く。今さっき、決めたの」
どうとも表現の仕様のない思いが、浮かんだ。アンジェラが一緒だったら、どれだけ心強いことだろう。だが、それはアンジェラを巻き込むことになる。彼女を危険にさらすことになる。
「……駄目、だって、アンジェラ。あんたはあたしに付き合うこと、ない」
「ばっかねー！　エリス」
アンジェラは大げさに溜息をついてみせた。頬に貼り付けた笑みはそのままで、告げてくる。
「人の話は聞きなさいよ。いーい？　私は私の意思で、そうするっ

て決めたの。私の意思で、よ。それをあんたに止める権利はない――違う？」
自らの顔に苦笑が浮かぶのを、エリスは自覚した。『約束』だ。
お互いが決めたことに対して、干渉はしない。
「……アンジェラ」
思わず、その名をもう一度呟いた。親しみなれた名前。
アンジェラは答えず、地面に放ってあったらしい自分のバッグを拾い上げると、エリスに背を向け、そのまますたすたと歩いていった。
「さーさー、とっとと行くわよ、エリス！　夜のうちに街は出たいものね！」
その後姿を見つめ――結局、こうなったアンジェラを止める術はないことを理解して、エリスは苦笑を漏らした。苦笑――いや、どうだろうか。本当はどこかで、こうなることを望んでいたはずだ、きっと。
アンジェラが、振り返って呼んで来た。
「エリス！」
ほんの少しだけ、遠くなって、けれどずっと近くなった親友は、満面の笑みを向けてきている。
その笑顔に促されるように、エリスは自らのバックパックを背負った。わき腹の傷の痛みは、なんだか知らないが薄く感じた。一応の手当てとして、バックパックから引っ張り出した包帯をきつく巻いておく。傷自体はさほど深くはないから、これで何とかなるはずだ。
そして――ふと、振り返る。
深夜のセイドゥール・シティ。
水路に覆われた、水に浮かぶ都。
空には月が浮かんでいる。月はたった一つだけなのに、セイドゥール・シティの水路には、同時にいくつもの月が揺れているのが、エリスにはなんとなく不思議に思えた。

（――ばいばい。セイドゥール・シティ）
一言、胸中で告げ、エリスはアンジェラのほうを再び振り返った。遅い、とでも言うように、ぷっと頬を膨らませたアンジェラが立っている。
「――早く、エリス！」
「……うん！」
エリスは地面を蹴って、アンジェラに駆け寄った。アンジェラがその名のとおり、天使の笑みで答えた。
空には月が浮かんでいた。水路にはいくつもの月が揺れていた。
月は満ちていた。
そして、時も満ちた。

1

アンジェラのわがままは、最高潮に達していた。
「眠いよー。ねぇぇぇむぅぅぅいぃぃぃ！　超眠い！　無駄にねむーいっ！」
本日十二回目の台詞だ。
（んなの知ったことか）
などと内心毒づきながら、エリスはとりあえず言葉を返した。
「……天気良いしね」
春の陽気は幾分いつもより暖かい気はしたが、まぁそれに不満はなく、あるとしたらやたらに眠気を誘うといったことくらいだろう。暖かいのは大歓迎だ。
後ろからとぼとぼと歩いてくるアンジェラの気配を感じながら、エリスはあごを上げた。
まだ低い位置にある太陽は、陽射しをきつく降り注いでいる。
陽光が木々の合間から煌いていて心地よい。が、逆に言えば遮るものがないと眩しすぎるほどだ。
（確かに、暖かいけど。ちょっと暑いくらいかなぁ）
なんだかここ最近、気候が妙な日が多い。また冬に逆戻りか、と感じるような寒い日があるかと思えば、今日のように暑いくらいに暖かい日もある。
（大陸間の異常現象……か、な？）
魔物の大量発生なども最近問題になっているが、こういう気候に関する妙もまた、そういったもののひとつなのかもしれない。
ともあれ、このバジル街道の深い木々の間では、暑すぎるということもない。涼やかな風と、少しばかりきつい陽射しは、ちょうど眠気を誘うのに適していた。アンジェラのわがままもそのせいだと思うことにする。
「疲れたよー」

違ったらしい。
「……まだ街を出て数時間しかたってませんけどお嬢様？」
「昨日夜通し歩いたしー」
「宿までだけでしょ」
しかも行き道をずれてまで宿に寄ったのは、野宿は嫌だと言ったアンジェラのせいだ。
「ベッド硬かったしー」
「安宿だから仕方ないでしょ」
もともと、アンジェラもエリスも、割と不自由なく暮らしてきた金持ちの娘だ。貴族家系のアンジェラにしても、騎士家系として地位を築いたマグナータ家の長女であるエリスにしても、安い宿というのは実のところ初体験だった。
アンジェラの言う通り、安宿のベッドの硬さに寝付けなかったのは事実だ。エリスもそのせいで、疲れはとりきれていない。
（そのうち慣れるんだろうけどね）
というよりは、慣れざるを得ないのだろうが。
それにしても、アンジェラの不平不満は次々と言葉になって漏れて来る。
「エリス起こすの早いしー」
「あんたが遅いんだって」
「ていうか、マジ眠いよぅ」
「もー少し行ったらレナード村ってとこに着くから、今は起きてなさい」
「足痛いー。疲れたー。眠いー。暑いー。喉乾いたおなかすいたー！」
「やかましぃ」
呻く。振り返り睨み付けると、アンジェラがぷっと頬を膨らませた状態で足を止めた。
低く、言ってくる。
「――ていうか。ウザいよー」

「……それは同感……」
苦笑して、エリスは頷いた。自らも足を止め、空を仰ぐ。
バジル街道。整備もろくにされていない道は街道と呼んでいいのかなんなのか知らないが、まぁそう呼ばれている。ジャリ道と、両脇の林。鼻先をくすぐる濃い緑の匂いは心地よいが、森林浴としゃれこむわけにはいかなさそうだ。
アンジェラがさっと前髪をかきあげ、呟いてきた。
「出て来てもらおうよ」
「……賛成」
エリスはペンダントに一度触れ、それからその手で腰の剣に触れた。なじんだ柄の傷を人差し指のはらでなぞりながら、声をあげる。
「――ってなわけで。残念ながら気付いています。眠すぎてこの子無駄に気がたってるみたいだから、早く出てきたほうが身のためよ」
数瞬の沈黙。ややあって――風が流れた。
アンジェラが拗ねた表情のままでそちらを向く。右手奥、街道脇の木陰。そこから、二つ、人影が出てきた。
――若い。
反射的に脳裏に浮かんだのは、その単語だった。
エリスはじっとその二つの影を見据える。
男だ。二人とも、背は高いほうだろう。エリスたちからすれば、頭ひとつ半は違う。年齢は――多少判りづらいが、十七、八、くらいか。アンジェラが小さく口笛を吹いた。
「カッコいいじゃん」
「あのね」
アンジェラのあっけらかんとした感想に、エリスは思わず苦笑を漏らした。
（まぁ確かに。美形っちゃ美形、かな？）
一人はエリスと同じ黄色人種――いや、エリス自身とはまた少し違うらしい。目鼻立ちがはっきりしている。彫りが深い。セイドゥールでは、というよりは、この大陸西部ではあまり見かけない顔立

ちだ。異国人だろうか。
長い黒髪と、同色の切れ長の眼。体の線は細いが、弱々しい感じは全く見受けられない。
もう一人。こちらは白色人種然とした容姿だ。ルナ大陸で一番よく見かける人種の特徴をかねそなえている。丁寧にカットされた、陽光に輝く金色の髪と、翡翠のような碧の瞳。手足がすらりと長く、剣を携えてはいるが、正直あまり似合っているとは思えない。慣れた感じは受けるのだが、むしろ楽器でも持っていたほうが似合いそうだ。
その、白人のほうが口を開いた。
「エリス・マグナータ……アンジェラ・ライジネス」
澄んだ声だ。清水のような雰囲気すら、ある。
「どうでもいいけど。家名、やめてくんないかなぁ……」
エリスは思わず嘆息を漏らしていた。家を出てきたのだから、自分にはもう家名を名乗る資格はないし、名乗りたくもないのだから、いいかげんやめて頂けるとありがたいと思う。最も、そんなことあちらがわには関係のないことではあるだろうが。
「そうだけど。なぁに？　悪役の世界には、相手を襲うときにはフルネームで呼びかけなければいけないとかいう法律でもあるの？」
アンジェラが飄々と言ってのけるが、それに構う様子もなく、今度は黒髪の男が口を開いた。
「気の毒だが、少々、手荒な真似をさせてもらうぞ」
その言葉に、エリスはアンジェラと顔を見合わせた。違和感が、二つ。
（……アクセント、こっちの方のじゃないな。東部訛り……？）
完全に訛っているわけではないのだが、微妙な違和感がある。この辺り――西部ではあまり聞き慣れない音だ。それが違和感の一つ。もう一つは、台詞の内容そのものだ。アンジェラが肩をすくめて続けた。
「へぇ。案外紳士なんだ。でもね、お兄さん。女の子を襲うのは、

感心しないわよ？」
（だよねぇ）
わざわざ襲うのに断りを入れてくる奴というのも珍しい。エリスは苦笑して、言葉を投げた。
「まぁ、それはいいけど――で、お兄さんたちのどっちが『ダリード』さん？」
ぴくり、と白人男の眉が動いた。黒髪のほうは、全くの無表情だ。気付いているのかいないのか、隠すのが上手いだけなのか知らないのか、それすら読み取れない。
ダリード。昨日聞いた名前だ。といっても、あの男が言っていたのは『おまえ達と同じ年頃の』だ。この二人だとしたら少しばかり年かさになるのだが。
どちらにせよ、この反応――全く無関係ではなさそうだ。
「昨日、ラスタ・ミネアで聞いたんだけど。『ダリード』さんとやらがあたし達狙ってるらしいんで。手ごまじゃなけりゃ、あんた達のどっちかがそうなんでしょ？」
挑発するように肩をすくめ、剣から手を離す。乗ってくるか否か。いちかばちかの懸けだ。
黒髪の男が、薄く唇を開いた。
「――ダリードとは、関係ない」
（……！？）
「エリス……！」
アンジェラが警戒したように小さく声をあげてくる。
知らないわけでもない。雇われているわけでもない。本人でもない。
――関係ない。
（別口……！？）
そうとしか考えられなかった。しかも『関係ない』と言う事は、この二人は『ダリード』とやらを知っている、確実に。
「どういうことよ！」

アンジェラが甲高い叫び声を上げた。黒髪の男が、淡々とした口調で続けた。
「――俺はドゥール」
「……ッ！」
唐突にエリスの肌が粟立った。膨れ上がる強烈な殺気。
反射的に足をひき、アンジェラを引っつかんで退がらせた。
危ない。
脳がその言葉をしきりに発している。
危ない。こいつらは、危ない。
もう一人の白人男が、口を開いた。
「――おれは、ゲイル……いくぞ！」
「来ないでいいわよっ！」
反射的にだろう、アンジェラが悲鳴のように叫んだ。そのアンジェラを背後にかばい、エリスは慌てて剣を引き抜いた。

――ィヂギィッ！

重く、歯の根の浮きそうな音がバジル街道の空に響く。同時にエリスの腕にしびれが来た。噛みあった剣を滑らせるために、角度をつけて無理やり流す。白人男だ。ゲイルと名乗っていたか。
（こいつ……案外やる！）
上段から振り下ろされた剣の威力は、ただ力任せにしただけのレベルではなかった。練りこまれた威力がそこにある。
エリスはアンジェラから離れるように距離をとった。この男、スピードもそれなりにあるようだ。昨晩の男に比べれば、スピード自体は遅いが、それでもエリスに付いてこられるのだからかなりのものと言える。
男――ゲイルはそのまま、こちらにむかってきた。流された剣に左手を添えて引き戻すと、そのまま突きに転じてくる。後ろに下がればアンジェラがいる。エリスは反射的に左に跳んだ。

「……っ！」
紙一重。鼻先を剣がかすった。エリスが左に跳んだ瞬間、ゲイルは突くのをやめて剣を薙いだのだ。
ド、ド、ド……と、心臓が恐怖を感じて鼓動をうるさくさせている。祈る。少し静かにして、後でいくらでも怖がっていいから、今は静かにして。
しゃがみこみ、エリスはすくい上げるように剣を振るった。ゲイルが跳び退り、間合いが開く。
と、そこへアンジェラの声が降り注いだ。
「――炎の精霊よ、風の精霊よ！　共に我が腕に今来たれ！」
呪文。唐突に炎が膨れ上がり、風が吹いた。そのまま、ゲイルに向かって熱風が襲い掛かる。助かった――とエリスは一つ溜息をつき、背後から援助をしてくれたアンジェラに親指を立てた。
「サンキュ、アンジェラ！」
「どーいたしましてっ！」
にっとアンジェラが笑い――その顔がそのまま固まった。
「――だめ、エリス！　跳んで！」
「……っ？」
訳も判らず、言われるがまま跳ぶ。次の瞬間、いままでエリスがいたその空間を、ゲイルの剣が薙いでいた。
「効いてない……！？」
アンジェラが悲鳴のような声をあげた。先ほどの魔導が、全く効果をなしていない。アンジェラが慌ててこちらに走り寄ってくる。
「どういうこと、アンジェラ！」
「わ。わかんないわよぅ！」
「――風に干渉しただけだ」
ゲイルが、淡々とした口調で告げた。
（風に干渉――？）
魔導に疎いエリスにはさっぱり判らない言葉だったが、隣のアンジェラが息を飲んだので、それが酷く異常なことらしいというのは

理解できた。
と、今度はいままで成り行きを見守っていただけの黒髪の男――ドゥールが、すっと右腕を上げた。武器は持っていない。
「なに……？」
思わず眉根をひそめる。ドゥールはそれには答えず、静かな表情のまま、パチン――と指を鳴らした。
その瞬間、自分の身に何が起こったのかエリスはよく判らなかった。
ただ言えるのは、脳が拒絶反応を起こすようなレベルでの爆発音があったという事。そして、周りの木々が数本壮絶な音を立てて倒れたという事。視界が煙に閉ざされたという事。最後に、自分の肌のあちこちに、裂傷が生まれたという事だけだ。
「きゃっ……！」
アンジェラの悲鳴が聞こえ、慌てて彼女をかばうように腕を回した。身長差で言えばほとんど変わらない――どころか、実はほんの僅かアンジェラのほうが高いのだが――彼女は、エリスの腕の中で身を縮めていた。瞬間的な『何か』が収まった後、エリスは我知らず閉じていた目を見開いた。
アンジェラの体が、震えている。
「――アンジェラ、怪我は！」
「……擦り傷……ひっどーい！　乙女の柔肌傷つけて！」
大丈夫そうだ。
頬や手足に赤い線が走っているが、大きな傷は受けていない。エリスはほっと安堵の息をつくと、アンジェラから離れる。
剣を握りなおし、向き直った。
「一体、なんなのあんた達は。変な魔導使いね？」
「魔導じゃ――」
エリスの言葉に反応したのは、ゲイルでもドゥールでもなく、アンジェラだった。彼女は細い体を震わせながら、悲鳴のように叫んだ。

「法技じゃないわよあんなの！　あれじゃ、あれじゃまるで――」
「魔法、か？」
その言葉を引き継いだのは、ドゥールのほうだった。感情すら見えない黒瞳に、僅かに光が反射する。
（魔導……法技？　魔法？）
エリスにすれば、どれも同じに思えるのだが――少ない知識を呼び起こし、考える。法技は一般的に使用されているもの。魔法は――
ふと、思い当たる。
魔女、特殊能力者しか使えないはずだ。アンジェラの『先見』の能力と同じ――！
「そうよ。あんたたち何者よ！」
アンジェラの声に、男達はお互い一度視線を交わすと、黒髪の――ドゥールのほうが、一歩前へ出て来た。胸元に手を入れ、そして引き出す。
バジル街道の木々の隙間から降り注ぐ太陽光が、引き出されたそれに反射した。
赤い、小さな石――

どくん

「……月の石……っ！」
アンジェラがかすれた声をあげた。
エリスは反射的に、左手で自分のそれを握っていた。月の石。あの男が持っているものと同じ、月の石――
「……じゃあ、じゃああんた……エリスと同じ……月の者――！」
「……」
肯定も否定もせず、ドゥールはそれを再び胸元にしまうと、また一歩、前に歩み出て来た。ゲイルも同じように近づいてくる。エリスとアンジェラは、それに反応するように二歩、後ろに下がった。
「エリス」

右隣に立っていたアンジェラが、エリスにだけ聞こえる声でささやいてきた。視線だけで促す。
「――ここから村まで、後どれくらい？　走っていける？」
アンジェラの質問の意味が判らず、エリスは眉を寄せた。一番近い村はレナードという名前だ。一度だけ行った事がある。そう遠くはない。ここからだと――
「……走れば、十分ってとこかな。走るの？」
アンジェラは答えず、男二人をにらみやったまま、エリスの手を握ってきた。剣を持つその手を握られて、反射的に振りほどきそうになったが、アンジェラの手の力が思いのほか強く、やめる。乾く喉に無理やり音を発してもらう。
「なに、アンジェラ」
「――十分、か。ちょっと……辛いわね」
アンジェラの横顔に、挑むような笑みが浮かんでいた。その表情に、エリスの心臓が高鳴った。酷い不安感。
「アンジェラ、あんた……まさか！」
「――やるしか、ないでしょう。ちょっとだけ無茶するわよ。死んじゃったら――ごめんということで」
「アンジェラ……！」
さらりといった言葉に、これからアンジェラがやることが危険度が高いものだと理解した。なんとなく判る。過去に一度だけ、たった一度だけだが、見たことがある。あれをやろうというのだ――！
しかしエリスが止めるまもなく、アンジェラがあいていた右手を上げた。声高に、叫ぶ。
「我が中に眠りし時の力よ！　我アンジェラ・ライジネスが命ずる！
我に先の未来を見せ、我らが時を進ませよ！」
――視界がぶれた。

2

胃の浮くような感覚。違和感――浮遊感とでも称すれば一番近しいのだろうか、感じたこともないような感覚が全身を支配した。

そして、急激な疲労が襲ってくる。

「――ッ……！」

エリスは我知らず、両手を地面に押し付けていた。剣は知らないうちに地面に転がっている。いつもなら絶対にしない。剣を粗末に扱うなんて事はない。けれど、そんなことに構う余裕がなかった。

体が、鉛を埋め込まれたかのように重い。肺が新しい空気を求めて、浅い呼吸を要求している。

「う……」

頭痛と吐き気――めまい。

湿った土の冷たさが、手のひらを通じて伝わってくる。土だ。つい先ほどまで足の裏にあったのは、バジル街道のジャリのはずなのに――

体の望むまま、短い呼吸を繰り返して、エリスは顎を無理やり上げた。冷たい汗が、一筋滑り落ちる。

「アンジェラ！」

叫び声のはずが、ひしゃげた声にしかならなかった。すっと血の気がひいていくのがわかる。こうなるから、嫌だったのだ――

エリスのすぐ右隣、アンジェラが倒れていた。

「アンジェラ！　この馬鹿！　なんて無茶したのよ！」

「……」

アンジェラは口を幾度か開いて、何かを言おうとしている。だがはっきりと音にならない。ふだんは白くとも健康的な顔色が青ざめている。ほんの一瞬――いや、正確には一瞬ではないのかもしれないが――で、このありさまだ。

エリスはアンジェラの口に耳を近づけた。細い、熱く湿った息が

かかる。
「……し、かたない、でしょ……」
途切れ途切れに、荒い呼吸の間からそういってくる。きつく閉じたまぶたが、僅かに開いた。湿ったアメジストの目が、こちらを見つめてきている。
「……はっ……ちょ……っと、私たちの『時間』を……十分、はやめた、だけ」
「馬鹿！」
思わず叫ぶ。
心臓が、呼吸が上手く出来ないためではなく別の理由で痛んでいる。さっそくこれだ――守ってやれないどころか、こんな目に合わせている。
「それやったら、あんたしばらく動けないんでしょう！？」
エリスの言葉に、アンジェラは僅かに目を伏せて肯定した。その行動は必要ないとも思える。実際、見れば判る。動けないのだ、アンジェラは。指一本動かすのさえ、辛そうだ。
「……擬似時間転移……擬似空間転移に近い、んでしょ？」
「……だ。か、ら。ごめん……って」
アンジェラが細く息を吐いた。白い頬に走った赤い裂傷が、痛々しさをいっそう増してみせている。エリスは思わずその傷を人差し指のはらでなぞった。
アンジェラの能力――『先見』。しかしそれは『一番使用度の高い』能力だ。正確にはアンジェラの能力は――『時間』に関する全て。
これもそのひとつだった。以前に一度だけ見たことがある、時間を早める能力。アンジェラ自身、その一度きりで懲りたらしく――下手をすれば、死んでいたといった――今日この瞬間まで、二度とやるつもりはないと断言していたのに。
「……しかた、ない、じゃない？」
アンジェラの頬が悪戯っぽく歪んだ。こんなときでも、アンジェ

ラはアンジェラだ。
「こうでも、しないと……逃げられそうに、なかったし。……あんただって、疲れ、てる、でしょ？　怒鳴ると体力、なくすわよ……」
アンジェラの疲労は、使用した魔法に体がついていっていないからだ。エリスの疲労とは違う――エリスの疲労は、慣れない感覚と、時間の急速な移動によって、体が悲鳴を上げているだけでしかない。アンジェラほど、辛くはない。
「……ごめ、やすませ……」
「判ってるわよ」
アンジェラの台詞をさえぎり、エリスはその細い手を握った。冷たい。
「とりあえず、宿……探すよ。歩ける？」
あいまいにアンジェラが頷くのを見てから、エリスは自らももう一度立ち上がった。なんとかなりそうだ。少なくともエリス自身は。転がった剣をしまい、一度大きく息をつく。
基礎体力はある。もう心臓も肺も、かなり落ち着いてきている。けれどまだいまいち感覚のはっきりしない両足に力をこめ、踏ん張った。アンジェラの小さな体に手を差し伸べ、起こす。
さらりと黒い髪が、頬にかかった。
アンジェラのほとんど全体重が、エリスにもたれかかってくる。昨晩のわき腹の傷がその拍子に痛んだが、さして気になるほどでもなかった。なんとでもなる。
「……アンジェラ。ごめん」
「……」
かすかにアンジェラが笑った。馬鹿なことを言うなとでも言うように。それがほんの少し辛く、けれど嬉しくもあった。
顔を上げる。
整備もされていない片田舎の土剥き出しの地面。遠くのほうでキラキラと池が輝いている。青い空を背景に、点在するように立てられた、古い建築技術の家々の姿。

鼻をくすぐるのは、遅い朝食の匂いだろうか。どこか遠くから、子供たちのざわめきも聞こえる。
ようやっと落ち着いて来た。バジル街道ではない。
――レナード村に、エリスたちはいた。

「エリス顔怖い」
ベッドの中からのアンジェラの台詞に、エリスは眉間に刻んだしわをさらに深くさせた。
「……あんたが無茶するからね」
こんな片田舎の村でも、街道沿いにあるというのは便利なものだ。民家をそのまま改装したような小さなものだったが、宿があった。
アンジェラをそこへ運び込み、ベッドに寝かせて――開口一番この台詞を図れ、エリスは少しばかり不機嫌になった。
「うー。……だからぁ、ごめんって言ってるじゃない」
ベッドに横になって、多少とも落ち着いたらしく、アンジェラは苦笑を漏らしてきた。
「大体、エリス。あんたは休まなくていいの？」
「あたしはもう大丈夫だよ。とにかくあんたが休みなさい」
「……はぁい」
存外素直に頷いて、アンジェラはシーツを引き上げる。隣に座っていたエリスは、軽く彼女の頭をなでた。
「おやすみ。でも……まあ、ありがとう」
「うん……」
アンジェラがまぶたを下ろした。やはり疲れているのだろう。
「――っと、そうだ」
いきなり慌てた様子でアンジェラが目を開いた。
「？　なに」
「エリス病院！」
「はぁ？　つれてっけっての？」

疲労なんてものは、寝ているのが一番だと思うのだが――と言いかけたエリスを遮って、アンジェラが早口でまくし立ててくる。
「そうじゃなくて。……わき腹の傷。昨日手当てちゃんとしてないでしょ？」
「……ああ」
右わき腹に触れてみる。もうすでに出血もないし、確かに痛みはするがさほど深い傷でもない。エリスは肩をすくめてみせた。
「大丈夫だよ。別に、もう平気」
「だめ。あんたってばいつもそうなんだから。私は寝てるから、エリスはその間に病院にいってきて」
頑としていってくるアンジェラに、エリスは小さな苦笑を漏らした。心配しているのだろう――が、今はこんな傷よりも、自分のことを心配して欲しいとも思う。
「……はいはい。一応探してみるよ。こんな村にあるかどうか知らないけどね」
「うん」
アンジェラがほっとしたように笑んだ。エリスは再度その艶やかな髪をなで、微笑を返す。
「じゃ、あたしは行ってくるけど……一人で平気？」
「平気よ」
「……判った。じゃあね。おやすみなさい、アンジェラ」
「おやすみなさい」
アンジェラが小さく笑って、瞳を閉じた。

こっぴどく叱られてしまった。
まだ脳内でがんがんこだましている医者の怒鳴り声に、エリスは半ばフラフラになりながら宿へ戻ってきた。
何で放っておいた。どこの子供？　どうしてすぐに手当てをしなかったんだ。親はどこに居る。何をしたらこんなことになるの。危

ないまねをするんじゃない――等々。
まさか、狙われました、とも、実は家出してきました、とも言えるはずもなく、適当にごまかしてきたのだが――医者というのはやはりどうにもエリスは好きになれない。カイリやパズーの家も医院をしていたが――
（……って、思い出すのやめよ）
ふいに暗澹（あんたん）な気持ちになりかけ、エリスは小さく頭を振った。
まだ、あっけらかんと思い出すほどには気持ちの整理がついていない。
安宿の、きしむ階段を上がり、アンジェラの寝ている部屋の扉をあける。
「あ、おかえりなさいエリス」
「ただいま」
ベッドに座っていたアンジェラが、顔を上げてきた。だいぶ落ち着いたようで、顔色も戻ってきている。
ほっと安堵の笑みがこぼれるのを、エリスは自覚した。
（よかった……大事に至らなくて）
アンジェラは手にしていた一冊の本を閉じると、それを小さく振ってきた。見覚えのある、青い表紙。
「借りたわよ、これ」
「……って。何で勝手に人の荷物漁ってんですかあんたは」
「だってヒマだったんだもん。でももうこれ、エリスんちであきるくらい読んだわよー。他のないの、他の」
「あのね」
嘆息。どうやらだいぶ元気にはなったらしいが――だからといって人の荷物を勝手に漁って、あまつさえそれに文句をつけるのはどうかと思う。
「あたしはそれが好きなの。読みたくないなら読むな。むしろ漁るな人の荷物を勝手に」
「いいじゃん別に。セシレル・ハイム、だよね？」

「そうだよ」
近寄って、アンジェラの手からその本を奪い返す。幾度も開いたおかげで、ページの隅はよれてしまっている。だが、お気に入りの一冊だ。
セシレル・ハイム――詩人画家の詩集だ。エリスの好きな芸術家で、自室の壁にはその絵のレプリカも飾ってあった。
「まぁともかくありがとう。暇つぶしにはなったわ。あ、それから、この子だしといてあげたからね」
「……って、ぬいぐるみまで引っ張り出してるし」
ベッドの枕もとに、白い犬のぬいぐるみが転がっている。お気に入りの一体で、バックパックに詰め込んできたやつだ。
詰め物がたりないせいで、やたら力の抜ける外観のぬいぐるみ。ココアと呼んでいる――白いのに。
このぬいぐるみは、実はアンジェラに以前もらったものなのだが、すでにそのときに名前がついていたからだ。白いのに、とはエリス自身さんざん思ったが、アンジェラに理屈は通じなかった。曰く『ココアはココアだから』。もはや訳が判らない。
アンジェラはそのぬいぐるみをぺしぺしとたたきながら、続けてきた。
「あ、洋服とかはクロゼットにかけといたわよ」
「勝手になにしまくってんですかお嬢様」
「ヒマだったんだもん。エリス帰ってくるの遅い」
「……病院行けって言ったのあんたでしょうが」
「そうよ？　ちゃんと行った？」
「……行きました」
ちょっとぐらい疲労していたほうが静かでいいのではないだろうか――などとどこか冷めた思いでアンジェラを見ながら、エリスは小さく嘆息を漏らした。

闇。

何もない、真の闇。夜ではない。もっと深く、まとわりつく、虚無――

闇が、そこにあった。闇しかなかった。

エリスはその中で一人、立っていた。

いや――立っている、のだろうか。地面の感触すらなく、立っているのかどうかすらよく判らない。浮いている？　それも違う――存在している、というのが一番近いのかもしれない。

「……ここ、どこ」

思わず言葉を漏らす。音が、おかしなほど響かない。奇妙な感触。

首を左右にめぐらす。だが、何もない。右もない、左もない。上下もない。手を伸ばす。視覚が効かないのなら、それ以外の感覚で情報を得るだけだ。けれど――いくら伸ばしても、なににも触れられない。

足を伸ばす。何もない。

匂いを嗅ぐ。何も匂わない。

耳を澄ます。何も聞こえない。

寒くも、暑くもない。本当に――『何もない』。

そんな空間が存在するなど、思いもしなかった。だが、ここにある――

ぞっと震えが来た。それで、少しだけ安心する。少なくとも『エリス』はここにいる――はずだ。

「アンジェラ……？　アンジェラ、どこ」

声をあげてみるが、言葉はまるでスポンジに吸収される水のように、掻き消えてしまう。

返答もない。

ぞっとまぶたを閉じる――閉じたのだろうか。本当に？　判らない。視界は変わらない。そもそも自分は本当に、ここにいるのか―

―？

いや。

『ここ』は本当にあるのか――？

『――月の者よ』

ふいに、音が響いた。

何処からともなく――まるで、洞窟内で叫んだときのように、反響して聞こえる。

「……つっ！？」

唐突に、心臓に痛みが走った。胸元を抑え、たまらずしゃがみこむ。頭蓋に響いてくる声に頭痛がした。

「……う」

汗が、流れる。

『――汝、我が前に来たれ。我、汝を待ち受けん――』

響く声。

闇があった。

ただ闇しかなかった。

闇だけがあった。

闇以外には何もなかった。

ただ、判る。

呼んでいる声がする。

自分を呼んでいる声がする。

そう――行かなければ、この声に応えなければならない。

行かなければならない。

呼ばれているから。待ってくれているから。あのお方が。

エリスはゆるりと立ち上がった。闇の中、頤（おとがい）を上げ、呟く。

「はい……ルナ、よ――」
自分を呼ぶ声がする。
呼ばれている。
「――ス。エリス――」
呼ばれている。
闇の中から、闇の向こうから。
呼ばれている。
「エリス……エリス？」
呼ばれている――誰に？
「――エリスってばあッ！」
「うわぁっ！？」
耳元で強烈に叫ばれ、エリスは飛び起きた。鼓膜がジンとしびれている。
「な、な、な……」
「……あ、起きた。よかったぁ……」
「よくなあいッ！　ビビるでしょ！？　何なのアンジェラ！」
反射的に叫び返して、エリスは声の主を睨みあげた。ベッドの上、覗き込んできている紫色の双眸。緩やかに揺れるウェービー・ヘア。
アンジェラだ。
彼女ははぁと大きく息をついてきた。あっけらかんと笑って続ける。
「おはよ。目、覚めた？」
「覚めたけど！　何もこんな無茶な起こし方ないでしょ！　鼓膜破れる！」
「あんた頑丈だから平気」

「鼓膜まで頑丈でたまるか！」
叫びながらベッドから立ち上がる。昨晩寝たときとは違う疲労感がある気がしたが――体はわりと素直に動いてくれた。しかしそのついでといわんばかりに、頭がずきりと痛んだ。
アンジェラの叫び目覚ましのせいでもないらしい。呻く。
「あー……なんか、ちょっと目覚め悪いかも」
「うなされてたわよ？　大丈夫？」
「……？」
うなされていた――？
きょとんとして顔を傾ける。別に暑くて寝付けなかったとか、疲れすぎててどうとか、そういうことはなかったはずだ。だとしたら、うなされる理由は一つしかない。
「……なんか、変な夢見たかも。……よく覚えてないけど」
気持ちの悪い、不快な感触が肌に残ってはいたが、それに理由が見つからない。夢なのだろう。
告げると、アンジェラは肩をすくめた。
「まぁ、夢なんてのはそんなもんでしょ。で、どうするエリス？　流石にそろそろ動かないと、昨日の二人が怖いわよ？」
「ん。……今日出ようか。あんたは大丈夫？」
「いっぱい寝たからね」
アンジェラの笑顔に、エリスはつられて笑った。
「オーケイ」
ゆっくりと歩き、部屋にある小さな窓を開いた。春先の花の香りが、流れ込んでくる。

レナード村。
本当に小さな村で、セイドゥール帝国領の中でもかなり生活水準が低いところだろう。役所もなければ学校もない。医師が居たのは幸いだが。

村そのものの外観にも、さして特徴があるわけでもない。赤茶けた屋根はセイドゥール帝国の中ではごくごく一般的なものではあるし、白い壁面もまたそうだ。作りの粗雑さや古さは逆に、帝都や大きな街では見られないが――まぁはっきりと良い特徴ではない。

唯一その名が知られているのは酒が美味い、といった程度か。レナード村の銘酒コンチェルトは、その筋では高く売れる。　現金収入があるのは、村としてはそこそこありがたいはずだ。

酒が美味いのは、気候的なものもあるのだろうが、それよりも水の美味さが効いているのだろう。

村の西北にある高山からの雪解け水が、小川となってこの村に流れ込んできている。その水の美味さは、わざわざそれだけのために立ち寄る旅人もいるというのだから、相当なものだ。

そのレナード村の、整備もされていない、ほぼ自然発生的な広場。広場の真中には噴水――といっていいのかどうか、というレベルのこじんまりとした奴ではあったが――があり、主婦や子供たちが井戸端会議やら遊びやらに興じている。

この広場は名前もないらしく、ただピアツェッタ（小広場）とだけ書かれたたて看板があった。

そこに、エリスとアンジェラがたどり着いたのは正午に少し手前の時間だ。露天商で簡単な買い物をするために寄ったのだが――

「……あー……なんかすっごいやな予感するわ」

アンジェラが広場の入り口で足を止めて呻いた。エリスもつられて足を止め、

「……って、いきなり。『見た』？」

「ううん。まだはっきりとは……ただ、そんな感じが――」

アンジェラの言葉がふいに途切れた。視線を上げ、広場の真中に立っている人物を凝視している。

（……？）

エリスもその人物を見た。

年のころなら、十四、五歳の少年だ。セイドゥール――というよ

りは、ルナ大陸全体でも珍しい褐色の肌をしている。それなのに、髪の色は白い――銀色、だろうか。
細く引き締まった体は、鈍い鉄色の上下に包まれている。背はさほど高くない。
その少年が、こちらを向いてきた。
澄んだ、真っ黒な瞳――
「……エリス・マグナータ。アンジェラ・ライジネス」
再び、名前をフルネームで呼ばれた。反射的にバッグ・パックを放り出し、剣を引き抜く。アンジェラが隣で、すっと足をひいて戦闘体勢をとったのが判った。
少年は薄い唇を開き、静かな口調で告げた。
「――俺の名はダリード。……死んでもらう」

3

――死んでもらう。
あまりといえばあまりの言葉に、沈黙がおちた。ややあって、脳内にじんわりとその言葉が染み込んでくる。
「――死んでもらう、ねぇ」
隣にいたアンジェラが、ショールを正しながら軽い口調で言った。
「おあいにくだけれど、そう言われて『はい判りました』って死ねるほど、甘い人生送ってきてはいないの。私たち」
ちらりと視線をやると、アンジェラの紫色の双眸は、挑むように少年を見据えていた。腕を組み、続けている。
「それにしても、いきなりよね？　本命さんのご登場はもう少し後でもよかったんじゃないの？　ねぇ、ダリードくん？」
からかうような口調。しかし言われた当のダリード本人は何の感情も表してはいなかった。ただ、澄んだその目でこちらを見つめてきている。
「あんたが、ダリードね。この間はあんなチンピラ送りつけてくれてどうも。それで？」
エリスもアンジェラに続いて口を割った。しかし、言葉に手ごたえがないというのは――どうにも気味が悪く思える。
「一体何のつもりなの？　出来ればあんたがあたし達を狙う理由、懇切丁寧にお教えいただきたいのですけどね？」
例によって例のごとく、相手をなめた言い回しをしてみる。
視界の端で、広場にいた子供や女性、露天商たちが逃げていくのを確認した。そう――はやく逃げて。危険の警鐘が胸を騒がせている。ほんのりと湿った手のひらを、ズボンでぬぐった。汗をかいている。剣を握りなおし、柄の傷を探して人差し指が動く。――触れた。もう一度しっかりと、握る。
そんな一連の動作を見届けたかのようなタイミングで、少年は薄

く唇を割った。鋭利な声。
「俺は命令に従うだけだ」
少年は腰に手を回し、剣を引き抜いた。あまり見慣れない形の片刃の剣。それを掲げ――まるで素振りでもするかのように振り下ろした。
次の瞬間だった。
轟音とともに、辺りの空気が一気に熱くなった。ぢり、とエリスの肌が痛む。とっさに閉じたにもかかわらず、まぶたの裏には赤い色がちらついた。
「っ……！」
アンジェラが押し殺した悲鳴を上げている。慌ててまぶたを押し上げ、アンジェラの姿を確認する。無事だ。
だが――広場のほうはそうもいかなかったらしい。
エリスたちの少し先、ダリードと二人の間の地面。整備もされていない土剥き出しの地面。それでも人々に踏み固められ、ある程度は見られるようになっていたはずのそれが、ぐつぐつと――まるで沸騰でもしたかのように赤く煮えていた。
「……！　魔法……！」
さすがに今度は判った。呪文もなしに、こんな芸当――そうそうできるはずもない。
「やだ……また！？　エリス、どうするの！　こんな村の中じゃどうしようもないわ！」
アンジェラが甲高い声をあげた。確かにそのとおりだ。こんな村の中では、アンジェラの法技も、エリスの剣も、思うように使えない。
（どうするっつったって……！）
「やめろ！　ダリード！」
一瞬パニックに陥りかけた意識に、鋭い声が割り込んできた。
反射的にそちらに目をやる。隣で同じように振り返ったアンジェラが、ひっと息を呑むのがわかった。おそらくは、自分も同じよう

に引きつった表情を浮かべているのだろう。
広場の入り口から、露店の間を拭って走り寄って来た人物が二人、いた。
長い黒髪を持った、黄色人種の男。金髪碧眼の白人男。
「……ドゥール、ゲイル！」
アンジェラが悲鳴を漏らした。
昨日の二人だ。あの森の中、襲ってきた二人。アンジェラの魔法がなければ、逃げられなかったかもしれない、あの二人が走り寄って来る。
エリス自身も、血の気がひいていくのを自覚した。冗談じゃない——そんな言葉が、ぐるぐると脳内を回った。冗談じゃない。
（三人まとめてなんて——勝てるわけないじゃん！）
慌ててアンジェラを引き寄せる。どうしようもない。けれどどうにかしなくては話にもならない。三人ともから距離を取り、アンジェラの細い腕がしっかりと左手の中にあるのを確認して、細く息を吐いた。
（大丈夫。まだ、ここにいるなら、守ってやれる）
どんな手を使ってでも。内心でそうつけたし、剣を構えた。
「……お前らか」
そんな状況にもかかわらず、相変わらず起伏のない声がした。ダリードだ。彼はすでにこちらには興味が失せたといわんばかりに、ドゥールとゲイル、二人を見据えていた。その様子に、確信を抱く。知りあいだ。
「何故だ。何故未だにラボにつく」
（……え？）
聞き慣れない単語に、エリスは思わず眉根を寄せた。意味が判らない。
ダリードのその言葉に、エリスは一度アンジェラと目を合わせた。アンジェラも、疑問だけをその瞳に宿している。
「そう……だね」

ふいに、自嘲的な声がした。苦笑とも取れるような響きを持った、そんな声。声の主は――ゲイルだ。僅かに目を伏せて、笑みを浮かべている。
「おれにも判らない。ただ……度胸がないだけ、かもしれないけれどね」
ゲイルの隣にいるドゥールの気配が、僅かに揺らいだ。よく判らない何かが、この三人のあいだにはあるらしい。
と――ふいに、左腕を引っ張られる。アンジェラだ。
そっと視線をやると、アンジェラが小さく腕を動かした。今のうちに退けばいい――という合図。
そうだ。理屈はよく判らないが、ともかく今この三人の意識の中に、自分たちは入っていないらしい。この機を逃すことはない。小さく頷き、じりっと後退し始める。
一歩――二歩、ゆっくりと。距離をとり、背を向ける。一気に走り始めようとして――
「逃げられると思っているのか？」
冷徹な声。瞬間氷水をかけられたかのように全身が総毛だった。
ずん、と背中に鈍い衝撃。と同時に、アンジェラの悲鳴が再び上がった。
そして、顔面に再び衝撃。
とっさにアンジェラと繋がっていた左手をきつく握ろうとして――気づく。アンジェラの腕は、そこにない。
いつのまにか離してしまったらしい。内臓が痛むような恐怖があった。背中の痛みはそれの前には霧散してしまう。
痛みの正体――は、後ろから何らかの攻撃を受けたらしい。弾き飛ばされて、地面に接吻していた。湿った土が唇にくっついて気持ち悪かったが、そんなことはどうでもよかった。あごをすったこと――？　それも、どうでもいい。重要なのは今、この手の中に幼なじみの腕がない、それだけだ。
痛みをごまかし、無理やり起き上がって目を走らせる。

「……アンジェラ！」
喉の奥でひしゃげた悲鳴。
居た。
ほんの少し、エリスよりも左前方にアンジェラが倒れていた。小さな体を縮こまらせて地面に横たわっている。目立った外傷はないようだが、痛みが酷いらしく、動かない。
「アンジェラ！」
慌てて走り出す。
ダリード？　ドゥール？　ゲイル？　知った事ではない。
とにかく、アンジェラを何とかしないといけない。そう思った。
しかし――
「炎よ」

紅。

静かな声とともに、一線、赤い炎が伸びた。ダリードだ。
一直線に走ったそれは、アンジェラに向かい――
（間に合わない！？）
腕を伸ばす。だが、ほんの数瞬、炎がアンジェラに届くほうが早いように思えた。

紅が、迫る。
アンジェラの紫色の双眸が見開かれる。
紅が、迫る。迫る。迫る――親友に。

「――アンジェラッ……！！」
声になったのか、ならなかったのか。それはもう、自分でも判らなかった。
数瞬の、永遠。
「危ないッ！」

（……え？）
引きつった声。思わずエリスは自分の喉を抑えていた。その言葉を発するのは、この場においてエリス自身しかいないはずだったからだ。だが、違う。声は男性のものだった。
目を見張る。
アンジェラの小さな体を、包み込む人物がいた。――ゲイルだ。
（ゲ、イル――？）
視界に飛び込んでくる映像が、理解の範疇を超えていた。思わず足が止まる。
ゲイルはアンジェラの体を包み込み、伸びてくる炎に向かって左手を下ろした。手刀のように。
そして――それだけであっさりと、炎は掻き消える。
「……いっ、やあ！」
再度、アンジェラの声。停止しかけていた脳がまた急速に回転をはじめた。エリスは慌てて走り出す。
アンジェラは、ゲイルの腕の中でもがいていた。当然だろう――自分を狙ってきた人物の腕の中にいる。それはどれほどの恐怖か。しかし、事実が別にある。今ゲイルは――アンジェラを、助けた。
ようやっとアンジェラの元へ辿り着き、エリスはゲイルからアンジェラを奪い返した。
理屈も状況も判らない。だが、アンジェラの傍にいるべきなのはこいつではない。自分だ。そう思った。
左手で、しっかりとアンジェラの体を抱きとめる。柔らかい感触と、アンジェラのつけている甘いコロンの香り。アンジェラがすがりついてくる。
「……エリ、ス」
「平気。大丈夫だから」
囁く。エリスはゆるりと距離をとり、ゲイルを睨みあげた。
「……どういうことなのか、説明してくれる？」
「――見たままだ」

困ったような表情を浮かべているゲイルではなく、その隣にいたドゥールが告げてくる。
「物事においての優先事項の問題だ。――今はおまえ達を狙っているのではない。ダリードを止めるのが最優先だ」
本当に――理解の範疇を超えている。そう思った。すでに頭の中にあふれている情報が、処理しきれない。意味が判らない。
アンジェラの体をきつく抱きしめる。とにかく、この手の中にある感覚だけは本物だ。
少年――ダリードが、小さく息を吐いた。
「茶番には、付き合えない」
右手を掲げ、今度は呪文を唱えた。アンジェラがとっさに反応したのだろう――唱えさすまいと動く。が、それよりも早く、呪文は完成してしまったようだ。
ずんっと、沈み込むような気配。地面が揺れた。半ば以上反射的に膝を緩め、衝撃に備える。アンジェラが、震える手で握り締めてきた。
「おまえ達には、今はこれで充分だ」
その言葉を最後に、ダリードの姿がぶれた。そして、何もなかったかのように、背後に広場のベンチがたたずんでいる。
「……え？」

――消えた。

そうとしか思えないし、そうでないならなんなのか、エリスには説明する知識もなかった。消えた。そこにいたのに、いない。
消えたのだ。
そして――先ほどダリードが熱した地面から、何かがでてきた。
燃え上がる泥人形というものがいたら、ようするにこんなものなのだろう。

幼児が泥粘土を適当にこねくり回して、ついでに二、三本、余計に手足や角やらをくっつけた人形。それに油でも塗りたくって炎をつければ、できあがり、だ。最も――人間サイズで、ここまで醜悪なものは幼児には作れないだろうが。

「どうする？」

淡白な声がした。ドゥールが、静かに腕を組んでいる。

つめていた息とともに、エリスは尋ねた。

「どうするって、何が」

「選択肢があるってことだよ」

場違いとも思えるのんきな声はゲイルだった。いや、顔はわりとまじめなのだが、声の響きが何処となく間が抜けて聞こえる。

「選択肢？　馬鹿にしているの？」

腕の中のアンジェラが泥人形を見据えたまま、小さく声をあげた。

「いち。泥人形をぶっ倒す。いち。消えたダリードくんをどーにかしてぶっ倒す。いち。あんたたちをぶっ倒す。いち。とりあえず全部ぶっ倒す」

（うわぁ）

あいも変わらず、アンジェラの思考回路は単純だった。エリスの張り詰めた表情に苦笑が宿る。

「あ。なるほど」

「納得するなゲイル。――言っておくが。おまえ達にあれは倒せない」

ぴくり、とまゆが跳ね上がるのを自覚した。ドゥールに向き直る。

「――どういう意味？」

「泥だからな。所詮。斬ったところで致命傷は与えられないだろう。それに、その前に炎がある。剣が歪むのと、剣があいつに届くのと、どっちが早いだろうな？」

ドゥールの冷めた黒瞳に、睨みつけるような自分の姿が映っている。鼻をくすぐる焦げたいやな臭いを追い払うように吐息を突く。そんなの、やってみないと判らない。

と、先ほどまで縮こまっていたアンジェラが、エリスの腕から離れて数歩前に歩み出た。泥人形と対峙して、腕まくり――袖はないのだが、まぁそれに似た動作――をする。そのまま、ドゥールのほうには向かないまま言った。

「ちょーっとお兄さん？　そのおめめは何処を見ていらっしゃるのかしら？　私を除外しないでくれる？」

「アンジェラ・ライジネス。おまえの得意法技は土と炎。――同系列の法技で何処まででできるつもりだ？」

「……くそむかつくわ」

アンジェラが似合わないスラングを吐き捨てた。事実らしい。――情報は握られている、ということか。

「さっきの選択肢に、ひとつ追加してみるのはどうかな」

ゲイルが、言ってくる。

「おれたちが、あれを倒してやるよ」

4

ぴくり、と自らのまゆが跳ね上がるのをエリスは自覚した。
「じょっ……」
アンジェラが戸惑ったような声で言う。
「冗談じゃないわよ！　意味が判らないわ！　説明しなさいよ！」
詰め寄るアンジェラから、ゲイルは数歩身を引いた。
「説明してもいいけれど。そんな暇があるかな、今？」
「グアアアアアアアッ！」
「――っ！」
ゆらりと佇んでいた炎の泥人形が、ふいに咆哮を上げて襲い掛かってきた。前に出ていたアンジェラを慌てて引っつかんで下がらせる。
振り下ろされる炎に包まれた長い手。アンジェラの髪の毛が数本、きりとばされた。アンジェラが小さな悪態をつく。
その間も、ゲイルとドゥールの二人は動じた様子もなく、僅かに身を引いただけだった。かわらない、どこか余裕すらある調子で続けてくる。
「二択だよ。死ぬ？　生きる？」
（……くそったれ）
吐き捨てる。
自分ひとりなら、多少の無茶をしてもよかった。申し出を無視して、やれるだけやってみた。だが――アンジェラがいる。
生存確率が低いほうをわざわざ選んで、彼女を危険に晒すのは、ためらいがあった。
（……）
仕方ない。
エリスは腹をくくったかのような気持ちで、口を開いた。
「――生きる。どんなことをしてでもね」

「エリスッ！」
非難じみた声をアンジェラがあげてきた。小声で、呟く。
「あんたを危険に晒すぐらいなら、あんたから非難されたほうがいいよ、あたしはね」
「……」
「卑怯だとかプライドがないとか、そう言うんなら別にいい。生きるためなら、どんな条件だって呑んでやるよ」
「いい心がけだね。長生きするよ」
薄く笑ったゲイルがそう言ってきて、エリスはただ無言で睨みつけた。
苦笑したように肩をすくめたゲイルは、次の瞬間行動に出た。泥人形の背後に回り込む。後ろには――噴水。
ゲイルは水に手を突っ込んだ。そして、濡れた手を振り下ろす。
「――風よ！」
小さな、それでも鋭い呼びかけのような声。

――ビゥッ！

風を切る音がした。ゲイルの濡れた手から滴った水が、まるでつぶてのように泥人形に向かっていった。
するどく、弾き飛ばされる水。
「……！」
あんな動き方をする水なんて、少なくともエリスは今まで見たことがなかった。息を呑む。
水は炎を包み込んだ。ぢゅうっ、と焼けた石に水をかけたときと似たような音が立つ。焦げくさい風が流れた。そう思ったときには、すでに炎は消えていた。ただの泥人形がそこにいるだけだった。
「ドゥール！」
ゲイルの声に、ドゥールは無言で右腕を上げた。手には何ももっていない。

（……あの時と同じ！）
反射的にアンジェラを守るように抱く。あれが結局なんだったのかは判らないが、良くない事だ。それだけは判る。

――パチン

ドゥールが指を鳴らした。その瞬間、一体何が起こったのか――すぐには理解できなかった。
土剥き出しの地面。簡素な噴水。古びたベンチ。小さな広場――
一瞬のうちに、その場には何もなくなっていた。
いや、違う。泥人形が、まるで風化したかのように唐突に崩れ落ち、消えたのだ。
（え……？）
「……崩れた……」
アンジェラが呆然と呟いている。
「崩れたのではない。崩したんだ」
当然といわんばかりの口調でドゥールが言ってくる。こちらに向き直って、数歩近寄ってきた。
「――お前らには倒せない。だが、俺たちにとっては簡単すぎる。おそらくは、ダリードの賭けだな」
「……？」
眉根をひそめて睨みやると、ドゥールではなくゲイルが苦笑してきた。
「よく判らないって顔をしているね」
「そりゃあね」
アンジェラが軽い口調で頷いた。
「聞いていいわよね？」
「答えられることならね」
「どうして、助けてくれたわけ？」
「助けたわけじゃない」

アンジェラの問いかけを遮るようなタイミングで、ドゥールが吐き捨てた。
「どう違うって言うの？　事実じゃない」
「違う。俺たちには俺たちの、おまえらを狙う理由がある」
「……」
アンジェラが、ドゥールを睨みつけた。鋭いアメジストの光。
その様子をみて、ゲイルが苦笑した。
「一時休戦、としないか。説明、するよ」

こんなにも心落ち着かないティー・タイムははじめてかもしれない。
内心でそんなことを思い、エリスは小さく苦笑した。手の中のカップに入ったアールグレイを飲み干す。
茶葉の香りが鼻腔をくすぐり、ほっと溜息が漏れた。
それにしても、居心地が悪い。
四名がけのテーブル。右隣にアンジェラが座っていて、エリスの向かいにはゲイル。その横――アンジェラの向かいにドゥールが座っている。
あの後、ゲイルの提案をしぶしぶ飲み込んで、近くにあった喫茶店に入ったのだ。
しかし店の人間の態度もどこかよそよそしい――というか、おそらく広場での一件を知っているのだろうが、煙たがられているというか、そんな感触があったし、何よりもこうやって向かい合わせに座ってからすでにずいぶん経つのに、向こう側の動きが皆無なのだ。
時計がないので正確な時間は判らないが、この硬直状態に入ってから、おそらくは十分を過ぎている。
簡素な木のテーブルと、申し訳程度に敷かれた少し黄ばんだテーブルクロス。暇つぶしに店の観察もしてしまう。
天井は低め。どうやったのかはしらないが、靴跡がある。子供がいたずらで靴を投げ飛ばしたのかもしれないが、奇妙といえば奇妙

だ。だが変わった点はそれだけで、ほかは特に何もない。取り立ててどうとあげることも出来ない喫茶店。よほど薄汚れているだとか綺麗だとかがあればまだいいのに、まるっきり絵に描いたような喫茶店だ。逆に言えば、こんな村の中でよく持っているなとすら思うが、観察対象としては一番意味がない。

（それにしても……どういうつもりなんだろうね）

ばれないように嘆息し、エリスは視線を前の二人に戻した。

ゲイルとドゥール。とりあえず名前だけは覚えた。だが、それ以上の情報がほぼ皆無のままだ。

どこか余裕のあるゲイルと、周りを拒絶するような反応を示すドゥール。何者なのかもよく判らない。

「いいかげん」

隣のアンジェラが、低い声を発した。

「ウザいんだけど？　話すっていったわよね」

ゲイルが苦笑を漏らした。

「うん。……どこから話そうか、ちょっと迷っていてね」

「最初からに決まっているでしょう。訳が判らないわ」

「そうなんだけれどね。――どうしようか。自己紹介からのほうがいいかな」

（自己紹介……）

内心、うめく。どうにもこのゲイルという男は、どこかずれがある気がする。この状況でそれがでるのは、何かがずれている。確実に。

「別にどっちでもいいけど」

アンジェラが呆れたような口調で言う。おそらくアンジェラも、エリスと同じような事を考えているのだろう。

「――じゃ、それでいいか。えーと。おれは、ゲイル・コルトナル。年は十七。こっちが従兄弟のドゥール・バレイシスで、おれよりひとつ年上」

「従兄弟？」

「うん」
ゲイルが頷く。エリスはなんとなく納得した。ドゥールが黄色人種にしてはどうにも彫りが深いのは、白人の血が混じっているせいらしい。
「職業は、一応魔導師かな。もう判ってると思うけど、特殊能力者。……正確には、違うのだけど、まぁ、今は関係ない」
意味ありげな言葉に、エリスは視線で促してみた。だが、気づかなかったのか――あるいは気づかないふりをしたのか、ゲイルはひょいと肩をすくめて、
「ちなみに、ドゥールは――月の者。エリスちゃんと同じだ」
「……ちゃん」
再びうめく。なんだかどうにもペースを崩されている気がして仕方がない。
ドゥールが月の者、というのはすでに判っている。だが、それでも、やはりきりきりと内臓が痛んだ。
「特殊能力は、なに？　あんた達のあれは、一体？」
アンジェラが、言葉を選ぶようにゆっくりと訊いた。
「おかしな魔法よね？」
「魔法なんてものは、大概おかしいものだと思うけどね。君のもそうだろう？　時間の能力者」
「私のことはどうでもいいの。すでにあんた達は情報を握ってるんでしょ？　今聞いてるのは、あんた達のことよ」
ぴしゃりとアンジェラが遮った。とん、とん、と人差し指でテーブルをたたいている。丁寧に切られた細い爪が、テーブルクロスにしわを寄せた。
「いい？　もう一度言うわ。お兄さん方？　私が知りたいのは、あんた達のこと。あんた達がどうしてあんな行動をとったのか、どうして私たちを狙うのか、その理由よ！」
どんっとアンジェラが机をたたいた。アンジェラらしくもない――相当いらいらが募っているらしい。エリスは机の下で、アンジェ

ラの太ももを軽くたたいた。
（落ち着きなさい）
「――……」
アンジェラが鼻から小さく息を吐いた。ゆっくりと呼吸を繰り返す。
ちらりと横目で見ると、アンジェラはただ黙って頷いた。判っているとでも言うように。
「……おれの特殊能力は『風』だよ。ドゥールは『物質における情報の崩壊』」
ゲイルが戸惑いながらいってきた。碧の瞳が、あいまいに揺れている。
「風に干渉する――精霊法技における風の能力。あれの特化版と考えてもらってもいいと思う。風の精霊に干渉して、事象を引き起こす。精霊法技との違いは、呪文が必要ないということと、精霊法技では無理だとされている土系列との掛け合わせもできるってこと」
「……土と風の掛け合わせ？」
アンジェラが疑わしげな声をあげる。
「火地風水を元にした精霊法技じゃ、まず無理よね。対極にある属性同士の掛け合わせなんて」
「まあね。だから、精霊法技ではなく魔法」
（……いまいちわかんないし）
なんとなくは判るのだが、真には理解できない。魔導音痴というのがこんなところで足を引っ張るとは思わなかった。まあ別に……ようするに『すごいらしい』と思っておいても問題はなさそうだが。
黙したままのエリスに代わって、アンジェラがまた口を開いた。
「で。ドゥールの――なんだっけ？」
「『物質における情報の崩壊』？」
「それ。そっちは？　どういう意味？」
「単純に言えば『破壊する』ってことかな。正確には違うのだけど。無機物の情報を司っているものを根源的に――じゃないか。情報を

組み立てている部分を崩すってことだから」
「……」
さっぱり判らなくなってきて、エリスは思わず机に突っ伏していた。頭から煙を吹きそうだ。
「……エリスって馬鹿」
「放っておいて……」
「え、えーと。難しかったかな」
ゲイルが困ったように頭をかいた。
「なんと言えばいいのか……その」
「――積み木だ」
ドゥールだ。感情のない、事務的な口調で言ってくる。
「子供がよくやるだろう。あれだ。無機物はその構造が単純だから、崩れやすい。俺がやるのはようするに、積み木崩しと同じだ。ただし、生きているものは構造が複雑だから、干渉できない」
「……あー……」
「今の泥人形もそうだ。人型を無理やり取らされていた情報部分を崩したから、土に戻った。それだけだ」
あっさりと言ってのける。が、それが容易なことでないことくらいは、エリスにだって判った。つまりは、それが『特殊能力』の『特殊能力』たるところなのだろうが。
それにしても――少しばかり、疑問が残る。
月の者。魔女。特殊能力者。
アンジェラにしても、目の前の二人にしても、その名を持つ人間は皆何かしらの『能力』を持っているらしい。だからこそ『特殊能力者』だと言えるのかもしれないが――だとしたら。
（あたしは？）
自問する。エリスには特殊能力と呼べる『何か』はない。一般的な人間よりも身体能力が高いのは自覚しているが、それは『能力』と呼べるほどのものでもない。月の者と呼ばれる存在の身体能力が高いというのは、過去の資料からも判っているが――だが、それは

『おまけ』的要素でしかなかった。大抵、それ以外にちゃんと特記出来るような『能力』がある。
なのに――エリスには、ない。
どこかで引っ掛かりを覚える。奇妙な不安感すら、ある。そんなもの、ないにこした事はないとも思うのだが、なにか――得体の知れない奇妙な感覚。
だが、考えても今は詮無いことだ。不安感を振り払うかのように、エリスは小さくかぶりを振った。顔を上げ、口を開く。
「で？　あんた達の狙いはなに？」
「――仕事だよ」
「ゲイル」
あっさりと言ってのけたゲイルを咎めるように、ドゥールが声をあげる。だが、ゲイルはそれを無視して続けた。
「お嬢ちゃんたちを、とある場所につれてくるように言われている」
「ゲイル。話しすぎだ」
「そう言う約束だからね。別に問題はないだろ。話したところで、優先順位が変わるわけでもない。後で問題になるとしても、力ずくでなんとかすればいい」
一瞬、空気の色が変わった。ドゥールが怒りをあらわにしたような目でゲイルを睨みつけたのだ。殺気じみた――と称しても変わらないほどの怒気がこもった視線。
だが、それは一瞬のことで、ドゥールはすぐにまた元の淡々とした表情になった。
（何なの。一体）
どうにも、空気がわるい。エリスは僅かに身じろぎして、訊いた。
「――別に、どうでもいいけど。じゃあなんで、攻撃してきたわけ？　おかしいじゃない？」
「別におかしくはないよ。ただ、連れて行くだけが目的じゃないからね。もうひとつ、目的があった」
「いらいらするな。もったいぶった喋り方はやめたら？」

「そんなつもりはないんだけどね。――ようするに、二人の力を引き出したかった。そのためには少々危険な目に合わせたほうが都合がよかったから。実際効果はあったよ。アンジェラちゃんの能力を確認できた」
まるで実験結果を報告するかの口調に、アンジェラが毒を吐いた。
「サイアクにむかつくわ。吐き気がする。くそったれ」
「だろうね。謝るよ。――でも、これは仕事だから、仕方がない」
「仕事ってことは、依頼主がいると見てもいい？　誰？」
「――親」
ゲイルの淡白な口調に、エリスは思わず口を閉ざした。聞きたくもない単語を聞いた気がする。
アンジェラに視線をやると、彼女もまた苦虫を噛み潰したような顔をしていた。そのままアンジェラがうっすらと口を開く。
「あんまり、深く聞いて楽しい話でもなさそうね」
「まあね。言いたくもない」
その言葉に、ゲイルが苦笑で応えた。エリスはアンジェラと視線を交わした。肩をすくめるアンジェラに代わって、今度はエリスが訊ねる。
「じゃあ、今からあんた達は、あたし達をそこへ連れて行くの？　敵として判断してもいい？」
「どうだろうね。味方でないことは確かだけれど、さっきも言ったとおり、おれたちの今現在の目的はダリードを止めること。君たちのことは後回しだから。現時点では明確に敵ともいえない、と思うよ」
「――あくまでも、現時点では、だ。間違えるな」
釘をさすようにドゥールが言ってきた。
思わず嘆息を漏らす。
「こんがらがってきたんだけど。ダリードとあんた達の関係って？」
バンダナの上からこめかみをもみ、エリスは低く言葉を続けた。
パズルのピースはそろった感があるのだが、どうにも組み合わせ方

がうまくいっていないらしい。いや、そもそもそろったようで、実は全くそろっていないせいかもしれない。よく判らない。
ゲイルが苦笑して――というか、苦笑しっぱなしというか。そもそもこういう顔立ちなのかもしれないが――言ってきた。
「いちから整理したほうがいいかな。じゃあまず、ダリードとおれ達の関係は、家族」
「……家族」
「今は深く訊かれても答えようがないから、流しておいてほしい。ようするに弟だ。で、おれ達の目的はさっきも言ったとおり、ダリードを止めること。君たちのことに関しては、二の次だけれど――二人を捕獲し、連れて行くことも目的のひとつとしてある」
「捕獲ねぇ。おあいにくさま。私たちは食料じゃないのよ？　知ってた？」
「え？　見れば判るよ？　え。……どういう意味！？」
「……」
アンジェラの皮肉に、ゲイルは瞬きで応えた。表情を見る限り、本当に驚いているらしい。
（やっぱどっかずれてるよこいつ……）
「……いいわ。もうどうでも。続けて」
「……？　ああ、うん」
嘆息と手のひらを差し出したアンジェラに、ゲイルはひとつ頷いた。
「それで、ダリードの目的。これは単純。推測でしかないけどね、間違ってはいないと思うよ」
ゲイルは薄い笑みを浮かべて、告げた。
「あいつの目的は君たちを殺すこと。ただ、それだけだ。他には何もない」

5

違う。
反射的に脳がそんな言葉をはじき出した。違う。
（違う――思い出せ。ラスタ・ミネアで会ったあの男は、なんて言ってた？）
ゲイルの碧色の目を見据えながら、ばれないように記憶を辿る。
ただ、殺すだけ。それが目的ではなかった――はずだ。

『とにかく、ペンダントを捕って来いと言っていた』

（――違う！）
その言葉を思い出した瞬間、エリスは胸中で叫び声を上げていた。
ゲイルの言っていることと、あの男が言ったことには決定的な矛盾があった。あの男はなんと言っていた？　まずはペンダントだとそう言っていたではないか。殺す、殺さないは後だと。そう雇われたと言っていたではないか。
ペンダント――月の石。月の者の証である、それ。とっさにペンダントに伸びそうになった左手を、ぎゅっとテーブルの下で握った。
悟られるな。まだ、判らない。
乾いた喉に、無理やり唾液を送り込む。
（どっち――？　ダリードの目的は、本当はどっち？　殺すこと？　ペンダント？）
判らない。考えても、答えは出そうにない。何故ダリードが自分たちを狙うのか、その理由も判らないのだから、考えようもない。
と、すれば。
（どっち。ゲイルは判って言っている？　あたしたちを試しているの？　それとも本当に、そう思って言っているの？）
ゲイルの顔を見据える。眉の位置。頬の筋肉。瞳の揺らぎ。呼吸。

僅かでもいい。何らかの――ほんの少しでも、何らかの手掛かりを得ようと見据える。どこか、不自然なところはあるか――？
薄い笑みを浮かべる口元は、どこか自嘲的ですらあった。
温和とさえ言える碧の目は、どこか哀しげですらあった。
顔色は、特に目立った変化もない。
呼吸も、落ち着いている。
完全なポーカーフェイスでもない限り――
（事実を言っている……つもり？）
嘘をついているというようには、見えなかった。
ふと、テーブルの下で、エリスの右手にアンジェラの手が触れた。視線は投げずに、僅かに手に力をこめる。同じ強さで、反応が返ってくる。なんとなく、理解する。
（アンジェラも、気づいた）
ゲイルと、ラスタ・ミネアの男の言葉の矛盾に、だ。
エリスはそのまま、視線をずらしてドゥールをみた。こちらは――
（……判んないな。こっちは本当に完全なポーカーフェイスってカンジ）
引き締まった口元に、微動だにしない目元。感情を欠落させれば、こんな顔にもできるのだろうか。全く読めない。
（――賭け、だな）
腹筋に力をこめ、一度だけきつくアンジェラの手を握った。驚いたような視線を右頬に受けるが、気づかないふりをして、エリスは口を開いた。
「ドゥール・バレイシス――だっけ？」
ドゥールが肯定の証のように眉を上げた。汗の浮き出た左手を、テーブルクロスにこすりつけて続ける。
「あんた、月の者だって言ったよね。月の石――あれ、もう一度見せてくれない？」
「……何のつもりだ」
「別に。確認したいだけ。あの石は贋作で、あんたの魔法もトリッ

クだって可能性もあるでしょ。あたしは、事実はあたし自身の目で見て決める。あんた達の言っていることの何分の一かでも真実があるかどうか、それで少しは判るでしょ」

声が震えていないことを祈りながら言う。数秒、ドゥールと視線が交差した。睨みつける蛇のような目。呑まれないように、見つめ返す。

しばらくして、ドゥールが懐に手を入れた。背筋に力がこもる。その懐から武器が出て来る可能性は高い。瞬間的な緊迫感。

だが、そんなエリスの内心を知ってか知らずか、ドゥールはあっさりと出した月の石をためらいもなくこちらに放ってきた。受け取らなかったせいで――放り投げられたそれが、本当に月の石か、あるいはナイフか何かの武器か、一瞬では判断できなかったので受け取らなかったのだ――月の石はテーブルの上で一度跳ねた。転がり、目の前でとまる。

アンジェラと繋いでいた手を離し、放り投げられたそれに触れる。月の石。エリスのそれのように、加工はされていない。ただ石のままの状態だ。

紅の、中に紋様が見える小さな石。触れた人差し指から、ひんやりとした感触が伝わってくる。掲げて、窓から差し込む陽光に透かしてみる。きらりと光が反射した。形はほんの僅かエリスのとは違うが、だがどこといって奇妙な点はない。

いや――この石そのものがすでに奇妙なものなのだから、そう言ってのけるのは適切ではないのだろうが。

「……本物だね」

偽物ではないだろう――そう判断して、エリスは言葉を漏らした。隣から覗き込んでくるアンジェラの興味深げな視線。苦笑して、その石を手渡してやる。アンジェラはしげしげとそれを眺めていた。

「ひとつ――質問、いい？」

「なんだ」

「この石。これ自体に、何らかの意味や特殊性はある？」

それが判れば、ダリードの真意に少しでも近づけるかも、知れない。エリスは悟られないようにあえて軽い口調で言った。
「――女神の使者、月の者が持って生まれる石」
「それは判ってるよ。それ以外に。例えば――この石自体に、何か力はある？　持ってるだけで大金持ちになります、とか。魔法が使えちゃいます、とか。あると嬉しいな、なんてね」
軽い口調で言ったあと、小さく頬に笑みを浮かべてみせる。ドゥールの眉が、ほんの少し怪訝を示すように動いた。
（まずった、か――？）
「――あるわけがないだろう。少なくとも、俺は知らない」
「そっか。ちぇ。ザンネン」
本当にそれだけだと思わせるような動きで肩をすくめる。それ以上何かを言われないうちに、エリスはアンジェラの手から月の石を取り上げると、ドゥールのほうに放り投げた。
（月の石そのものに理由がないとすれば、狙う意味がさらに判らなくなる――本当に、売りさばくつもりとか、研究対象にするとか、そうでもない限り）
ダリードの目的は、結局判らないままだ。
だが、ダリードの言っているはずの『目的』と、ゲイルたちの認識しているダリードの『目的』に相違があるのは事実なのだろう。
言うべきか、言わざるべきか――それもまた、賭けだ。
（あたしあんまり賭けは得意じゃないんだけどなぁ）
内心で嘆息を漏らし、エリスはテーブルの下にあった左手を上に出した。レース地のテーブルクロスの上で、両手を組む。掠れた生地の感触が、今現実にこの混乱した事態が起きているのだと訴えかけてきている。
（言わないほうがいい、かな）
その情報が、たとえどんな形であれ、目の前の二人にはないとしたら、それはエリスたちに有利に働く可能性もある。今は言わないほうがいいだろう。こととしだいを見極めてからでも、遅くはない。

「それで――」
ふと、アンジェラの鼻にかかったような声がした。横目で見やると、アンジェラもエリスと同じようにテーブルの上で手を組み、口を開いていた。
「ようするに。ダリードの目的が私たちを『殺す』ことだとして――理由は？」
「さあ――ね。それが、おれたちにもよく判らないんだ。……暴走している、としか表現できない。だから、言っただろ。おれたちの今の目的は、あいつを止めることだって」
ゲイルの苦笑に、アンジェラが肩をすくめてこちらを見てきた。お手上げ、といったように。
「まぁ、今は考えても答えはでそうにないわね。いいわ、許してあげる。つまり。私たちを助けたのは――あんた達の目的のためってことでいい？」
「そういうことになるね。君たちを殺されると『仕事』のほうに支障がでる――さっき言った『とある場所へ連れて行く』ってやつだね。それが出来なくなると、おれたちも困るから。けど……」
ふと、ゲイルが口をつぐんだ。迷うような視線を天井に投げ、ややあって薄い唇を開く。
「――本心は、さっきも言ったとおり、ダリードを止めたい。やっぱり、こんな状態になっても、弟は弟で――家族だから。詳しいことはあまり言いたくないけれど、ね。それは真実だよ」
「……」
思わず複雑に思いが揺れる。アンジェラも、そうらしい。紫色の瞳が戸惑いの光を浮かべていた。
答えられずにいると、ドゥールが無造作に立ち上がった。テーブルの上にあった月の石を懐にしまい、無言のまま歩き出す。
「ちょっと！」
「――もう用はない」
にべもなく言い切り、ドゥールはこちらに視線を投げてきた。

「説明は終わったはずだ。おまえ達を助けたのは、こちらの都合だ。それでいいだろう。今はおまえ達に手は出さない。――ダリードを追う」
「お、追うってたって……いきなり消えたじゃん、あいつ！」
「そう遠くには行っていない。すぐに追いつけるはずだ」
ドゥールの言葉に、ゲイルも立ち上がった。チップをテーブルの上に置くと、軽く肩をすくめて、
「どこかでまた会うと思うけれど、そのときは――まぁ、よろしくね。お嬢ちゃんたち。……それじゃあ」
あっさりと――そんな言葉だけを残して、ゲイルは背を向けて歩き出した。ドゥールと二人、出口へ向かう。
「……また、か」
今度会ったときは――完全に、こちらを狙ってくるときだろう。殺される心配はないようだが、だからといって見逃せるわけもない。しかし、二人は強かった。今、不意打ちをかけたところで倒せる保証も、また会ったとき、この間と同じように逃げおおせる保証も、ない。
（――どうする）
少しずつ、遠ざかって行く二つの背中。どうする。自問する。どうすればいい？
（……）
ふと、脳裏にひとつの考えが閃いた。あまりにも馬鹿馬鹿しい――そう思わずにいられないような、閃き。だが。
「エリス」
アンジェラの鋭い声。
「覚悟は決まってる？」
その言葉に、思わず苦笑が漏れた。どうやら、アンジェラはエリスと同じことを考えついたらしい。
「あんたさえ良ければね」
エリスの言葉に、アンジェラの頬が軽く歪んだ。

「私もさっきのエリスの言葉に乗ることにするわ」
「と、言うと？」
「――どんな手を使ってでも生き延びてやる」
言うなり、アンジェラは椅子を蹴って立ち上がった。壮絶なその音に、室内の隅に控えていたウエイトレスが飛び上がったが、とりあえずチップを多めに置くことで勘弁願うことにする。
「ちょーっとストップ」
アンジェラは言いながら二人の前に回りこんだ。エリスも付いていく。
「いくらなんでも、それはないんじゃないの？　お二人さん？」
回りこんで二人を見上げる。ゲイルもドゥールも、そろって、目を白黒させていた。呼び止められるとは考えていなかったらしい。エリスが肩をすくめていると、隣のアンジェラが大仰に腕を組み、嘆息を漏らしながら続けた。
「そうよねぇ。気になる台詞だけ残しておいてバイバイ？　今度あったらよろしく？　ジョーダンきっつい！」
「え……え？」
ゲイルの引きつった声を無視して、アンジェラはすらりと細い指を左右に揺らした。
「ダメよ。お兄さん方？　あんまり人を甘く見ないほうがいいわ。特に女の子はね、計算高い生き物なのよ？　今度会ったら私たちを狙うような危険因子、放っておけるはずないじゃない？　だからといってまぁ、勝ち目の薄い戦いをわざわざ吹っ掛けるほどお馬鹿でもないけれどね、私たち」
「――何が言いたい」
ドゥールの低い声に、エリスは一度アンジェラと顔を見合わせた。小さく顎を引き、お互いに考えていることがそうだと確認しあう。
それから、ゆっくりと告げた。
「提案があるの」
「提案？」

「そう」
一度頷く。
「あたしたちはダリードくんに命を狙われている。そして、あんたたちはダリードくんを止めるために追おうとしている」
「取引いたしましょ、お兄さんたち」
アンジェラが言葉を引き継いだ。左手で髪をかきあげ、それからその手で唇を覆って僅かに笑う。
「私たちが囮になってあげるわ。ダリードくんは私たちを狙っているんだから、私たちと一緒にいればすぐに会えるんじゃない？」
ゲイルの目が見開かれた。完全なポーカーフェイスだと思っていたドゥールの顔にも、ぎょっとした色がさしていた。それが、少しばかりの優越感すらうむ。エリスは頬をゆがめたまま、続けた。
「正直言って――今のあたし達じゃ、戦力的にあいつに勝てそうにもない。あんた達の力が欲しいの。あたし達は囮になる。あんた達はあたし達に力を貸す。悪くないと思わない？」
「これが私たちの提案よ。どう？　ひとつ、のってみない？」
アンジェラの軽い口調に、ドゥールが薄く唇を開いた。
「悪くはないな、確かに。だが、その場合俺たちの『仕事』はどうなる？」
エリスは一度アンジェラと顔を見合わせる。おそらくこの辺りも、同じ考えだろう。アンジェラが頷くのを確認してから、エリスは告げた。
「あたし達を連れて行くってやつよね。それは後の問題でしょ。それはそん時考える」
「……」
絶句した――というのが一番表現としてあっているのだろう。ドゥールは目を見開いたまま、言葉を漏らさなかった。アンジェラが軽く笑う。
「無茶苦茶な、って思ってる？　いいわ、別にそう思ってもらっても。じゃあこうしましょ？　ダリードくんの関係がひと段落ついて、

あんた達を信用できそうだと思ったら、無条件でついていってあげるわ。抵抗はしない。逆ならとっとと逃げるから。文句なしね」
「……け、けど」
ゲイルの戸惑った声に、エリスは手のひらを向けた。
「何？　言いたいことあるんなら、言ってみれば？」
「もし。おれ達が嘘をついていたら？　仕事なんてなくて、ただ君たちを狙っていただけだとしたら？」
「あんた嘘つくの下手そうだからそれはないと思うけど」
「……」
アンジェラがけらけらと甲高い声で笑った。
「だから、言ってるでしょう。その時はその時よ。私たちの見る目がなかったってこと。あんた達を恨んだりはしないわ」
と、笑い声を止めると、真面目な目で告げた。
「――私自身の見る目に支払う代価が、私自身だって言うなら、それくらいの覚悟はあるつもりよ」
「アンジェラと同意見」
エリスも頷くと、もう一度二人を見上げた。
「さて。どーする？　お兄さんたち？」
沈黙がおちた。
じっと、二人は動かずにこちらを見下ろしている。
睨むように、挑むように見上げているうちに、だんだん首が痛くなってきた。身長差のせいだと思うと、少しばかり悲しくもあったが、とりあえずそのあたりは無視することにする。
ややあって――ふと、ドゥールの頬に苦笑のような色がさした。
静かな声が、告げた。
「全く。最近のガキはちゃっかりしてやがる」
「――！」
エリスは思わずアンジェラと顔を見合わせた。これは――
低い苦笑の声に、もう一度二人を見ると、ゲイルが困ったような顔で頭をかいていた。

「わかった。条件を呑もう。こっちとしても、悪くはないしね」
「じゃあ」
「ああ」
ゲイルはこくんとひとつ頷いて、それからやや迷う様子を見せた後左手を差し伸べてきた。
「――利害関係が一致した、ってことで。よろしく、エリスちゃん。アンジェラちゃん」
なんともまぁ、奇妙なことになったものだ――自らの招いた結果であるとはいえ、エリスは内心で苦笑した。
アンジェラと視線を交わしてから、差し伸べられた左手をゆっくりと握り返した。
繊細に見えたが、所々皮膚が厚くなっている。戦う者の手だった。
碧色の瞳を見上げ、エリスは唇を開く。
「――よろしく。ゲイル、ドゥール」
その握手が、不思議な協定の証になった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3494z/

紅月は女神の祈り

2011年12月20日23時58分発行